

第5回青森県水産業改良普及事業協議会資料

私たちの水産業改良普及研究

と き 昭和39年1月20日～21日

と ころ 青 森 市 自 治 会 館

青 森 県

青森県水産業改良普及会

5回 目 次

漁村における農業経営について	1
勝野沢漁協婦人部	須藤 さく
私達の婦人部と農業経営	7
東田沢漁協婦人部	佐々木 さくら
滑車利用のり養殖について	10
清水川のり養殖研究会	船橋 銀作
ヒラメ曳釣漁具の改良について	14
白糠小型漁船組合	東田 貢
ハモ籠漁業について	20
泊漁業研究会	坂井 留吉
ブリー一本釣漁業を省みて	25
下北郡東通村大字尻屋	尻屋漁業研究会
ウニ桁網の改良と私達グループの歩み	31
東津軽郡今別町字大泊	大泊研究会
たい延縄漁業の改良について	36
東田沢 N.T.S 漁業研究会	米内山 松則
私達の歩み	40
福浦水産研究会	会長 田中 太吉
尻屋沖ブリー漁場について	43
大間漁業研究会	泉 徳実

5回 39.1.20~21

青森市 自治会館

漁村における農業経営について

脇野沢漁協婦人部

須 藤 き く

私達の村は以前は鱈の脇野沢とまで云われたほど鱈漁で栄えた漁村ですが昭和24年から急激に不漁となりまして灯の消えた一寒村になりました。勿論その後、いわし定置漁業などで努力はしてきましたが、それに反して漁業経営は赤字続きで向上の色が見えず、また農業経営にしましても背後に急傾斜の山をかかえておりますので耕地面積が少なく従って農業で生計を立てるのもむづかしく村民の多くは出稼ぎを主体とした経済でもって細々と生活を支えなければならぬ状態となって来ました。

農業生産面においても気候的にはあまり恵まれず、ヤマセが長続きしますと、ぐんと生産が低下します。耕地の70%は10度以上の傾斜地が多いため収量は低く、しかも作物の作付形態は自給度が高く、馬鈴薯が約30%作付されて、これが大半は養豚の餌料とされています。商品作物のナタネ、タバコ、てん菜の作付は年々増加の傾向にありますが、これらの換金作物の割合も約6%程度にすぎません。

取り残された私達に出来る、もうかる方法はないだろうか、とくに野菜栽培は面積の割合に収量が少く、しかも冬期間から春先にかけて、この自給野菜にも事欠くありさまで、これの殆んどが移入によっていました。この中でも葱、玉葱、ほうれん草、白菜などが多く、これらのものを地元自給できる分だけでも生産する体制を整えようと3年前より農協の援助を得て農業改善普及員の指導を受け栽培に当ってまいりました。その中の昨年私達の部で行なった成績を申しあげてみたいと存じます。

私達の部でこれを選んだ理由と目標は、

第1表

理 由	目 標
1. 野菜の栽培が計画的でない	1. 計画的な野菜の輪作栽培
2. 野菜の生産量が少なく自給出来ない	2. 栽培技術の習得
3. 緑色野菜の摂取量が少ない	3. 緑色野菜の端境期の短縮 (ビニール、フェルム利用と促進栽培)
	4. 栽培技術の検討工夫による生産向上と自給から販売へ進む (野菜市日の設定(毎月24日) 臨時生産物の販売)

以上のことを実行するために、2アールの畑を借用し次の方法で栽培しました。

第2表

項目	種類	春まき白菜	春まきほうれん草	長ねぎ	きゅうり	秋まきほうれん草
作付面積		1アール	33平方米	1アール	33平方米	33平方米
まき付月日		4月29日	3月30日	7月13日	4月23日	9月5日
収穫月日		6月24日	5月2日~6月15日	11月10日	7月12日~8月21日	11月10日
収穫量 kg		450 kg	460把	188 kg	73 kg	345把
金額		9000円	7820円	7520円	1816円	6900円
所要経費(労費を除く)		820円	1760円	1155円	610円	610円
純益額		8180円	6060円	6365円	1206円	6290円
労力(時間)		9時間半	44時間	41時間	6時間	4時間
育苗播種		ビニールトンネル式				
月日		3月30日		4月29日		
備考				白菜の跡作	ほうれん草に点まき	きゅうりの跡作

なお以上のことがらを具体的に申しあげますと、

1. 春まき白菜

1) 栽培について

- | | | |
|--------------|------|----------------|
| a) 栽培面積及作付品種 | 1アール | 長岡交配春まき極早生白菜 |
| b) 育苗 | 播種期 | 3月30日 |
| | | ビニールトンネル式ポリ鉢使用 |
| c) 耕起整地 | | 4月29日 |
| d) 定植 | | 4月29日 |
| e) 栽培距離 | 畝巾 | 60センチメートル 株間 |
| | | 45センチメートル |
| f) 施肥量 | 苗床 | 33平方米 |
| | | 硫安 400グラム |
| | | 過磷酸石灰 200グラム |
| | | 塩化カリ 150グラム |
| | | 消石灰 110グラム |
| | | 堆肥 5キログラム |

本畑1アール当り

元肥 { 堆肥 150 kg 消石灰 11 kg
 硫安 6 kg 過磷酸石灰 10 kg 塩化カリ 3 kg

追肥 { 1回 5月10日 硫安 2kg 塩化カリ 1kg
 2回 5月15日 硫安 2kg 塩化カリ 1kg

2) 農薬散布 1アール当り
 1回目 DDT 5% 粉剤 300g
 2回目 DDT 5% 粉剤 300g

3) 収穫期 6月24日

4) 収量 1アール当り 450kg (120x) (単価 1kg 20円)

2) 収入と生産費 (1アール当り)

a) 収入 9,000円

b) 生産費 8,200円 (現金支出)

1) 育苗資材のビニールと竹は古物でほうれん草のトンネルと一緒に使用した。

ロ) 種子代 20ml 150円

ハ) 肥料費 670円

硝石灰 110円 硫安 250円 過磷酸石灰 150円

塩化 160円

ニ) 農薬費 50円

3) 労力 9時間30分 (播種から収穫まで)

2. 春まきほうれん草

a) 栽培面積 33.0 平方米

b) 品種 ビロフレー キングオブデンマーク

c) 播種 3月30日

d) 栽培法 ビニールトンネル式の利用 5月10日に除去

畦巾 135cm 広巾散播

種子量 33平方米当り 600g

e) 施肥量 堆肥 50kg 硝石灰 4kg 硫安 4kg 過磷酸石灰 4kg

塩化カリ 2kg

f) 収穫期 5月2日より随時収穫し 6月15日で終る

g) 収穫量 460把 1把平均単価 17円 7,820円

2) 収入と生産費 (33m²当り)

a) 収入 7,820円

b) 生産費 1,760円

1) 資材 (ビニール、竹) ビニール 18m 900円 古ビニール 3米使用 竹 50本 250円 古物 20本使用

~ 4 ~

ロ) 種子代 6 dl 360 円

ハ) 肥料費 250 円

3) 労力 44 時間

3. 長ねぎ(白菜のあと作)

1) 栽培について

a) 栽培面積 1 アール

b) 品種 石倉一本太葱

c) 育苗 播種 4月29日

播種量 50 ml

冷床 1mの平畦 6cmの径播

d) 施肥量 苗床 3.3 m²

推肥 10kg 消石灰 400g 硫酸 1kg 過磷酸石灰 15kg

塩化カリ 1kg

本肥 1アール当り

元肥 { 推肥 200kg 消石灰 11kg 硫酸 8kg
過磷酸石灰 11kg 塩化カリ 4kg

追肥 { 1回目 硫酸 2kg 塩化カリ 1kg
2回目 " 2kg " 1kg

e) 耕起整地 7月10日

f) 定植 7月13日

g) 土寄せ 1回目 8月13日 2回目 9月5日 3回目 10月7日

h) 収穫期 11月10日

i) 収量 188kg

2) 収量と生産費

a) 収入 7,520 円 (1kg 当り 40 円)

b) 生産費 1,155 円

1) 肥料費 810 円

(石灰 120円 硫酸 325円 過石 190円 塩化カリ 175円)

ロ) 種子代 50 ml 345 円

3) 労力 41 時間 (育苗から収穫まで)

4. きゅうり(ほうねん草のあと作)

1) 栽培について

a) 栽培面積 33 m²

b) 品種 加賀節成きゅうり

- c) ほんれん草 トンネル内に4月27日、8cmの育苗、播種
(45cm間隔の点播き)
- d) 施肥量 ほうれん草生育中に播種したため元肥はやりませんでした。
追肥として1回目(6月15日) 硫安2kg 塩化カリ1kg
2回目(7月12日) " "
- e) 薬剤散布
1回目(7月16日) テントムシダマシ防除リマート粉剤 1kg 散布
2回目(8月1日) 馬鈴薯粉剤 1kg 散布
- f) 収穫期 7月12日より8月21日まで6回収穫した。
- g) 収穫量及金額

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	計
収穫月日	7月12日	7月16日	7月17日	7月19日	8月1日	8月21日	
収穫量	6kg	3kg	4kg	6kg	4kg	13kg	73kg
金額	270円	136円	100円	160円	870円	220円	1,816円

2) 収量と生産費

- a) 収入 1,816円
- b) 生産費 610円
- 1) 種子代 60ml 210円
- ロ) 肥料 150円
- ハ) 農薬 250円

5. 秋まきほうれん草(きゅうりのあと作)

1) 栽培について

- a) 栽培面積 33m²
- b) 品種 ビロフレ
- c) 栽培様式
1) 60cm平畦散播
ロ) 播種期 9月5日
ハ) 播種量 33m²当り 6dl
- d) 施肥量
堆肥50kg、消石灰4kg、硫安4kg、過磷酸石灰4kg
塩化カリ2kg
- e) 収穫期 11月10日
- f) 収量 34.5把

~ 6 ~

2) 収入と生産費

ア) 収入 6,900円 (1把20円)

イ) 生産費 610円

1) 種子代 360円

ロ) 肥料代 250円

3) 労力 4時間

1) 耕起、整地、施肥 2時間

ロ) 畦立 30分

ハ) 種まき覆土 1時間30分

以上が2アールの畑を利用しました栽培実績であります。このように僅か2アールの土地から凶表に見られる通り私たちが想像もしておりませんでした収量と売り上げ金額を得ることができました。

私たちが今まで栽培しておったやり方が土地の利用法から云っても非常に不合理な作り方で、しかも栽培技術がいかに低かったかというところがはっきりわかりました。

このような栽培法を今後部員全員で力を合せて各自の畑に実行して野菜の生産量を向上させると共に端境期を解消して村内の完全自給はおろか、生産体制を強化し夏季間の冷涼な気候を生かし野菜の産地を形成するように努め私たち主婦の力で出来る現金収入のみちを考え、不安定な出稼ぎによる生計をいくらかでも補い、明るい家庭を築きあげたいものと思っております。

以上私達の一年間の歩みの一端を申し上げますが皆様のごきたんのないご意見や、ご助言を賜われれば幸いです。

私達の婦人部と農業経営

東田沢漁協婦人部

佐々木 さくら

東田沢は樺山、大島で知られております夏泊半島の先端にありまして、
ノ8の戸程の漁村でございます。農業を兼業としておる漁家も多く、その中
、漁協婦人部に加入している会員はノ60名でございます。

昭和33年に信漁連の御指導により、日料貯金業務を主として婦人部が設
立されたのでございます。それ以来漁業組合はじめ関係の皆様御指導を載
き生活改善その他いろいろ婦人部として活動を行なつて参りました。

貯金業務から始められた婦人部でございますので組織は兼金する貯金箱一
つのノ10名を単位として、ノ6名ノ組の組を作り、部長ノ1名、副部長ノ1名、
各組から組長をノ1名づつ、ノ6組ございますので組長もノ6名、この組長の
中から幹事3名を送出し役員としております、会計書記は貯金その他の都合
から組合の職員の方をお願い致しております。

なお地域婦人会もございまして、私達婦人部員も皆婦人会の会員でござい
ます。従つて役員こそ違いますが同一で、事業、活動等は一緒に行なつてお
ります。ただ婦人部として介担する活動は日料貯金や主に生産につながる活
動が多く、教養や生活改善等の関係は婦人会が担当することが多くなつてお
ります。

婦人部発足の当時は、ほたて貝等かなり漁獲され当地の漁業も活気がござ
いりましたが最近では地元の漁業も全く不振となりました。せして漁業から出稼
ぎに出て行く人が多くなつて参りました。私達主婦も今迄男の人がやってい
た仕事まで受持たなければならなくなりました。農作業は殆んど主婦の仕事
となつてしまい、人手不足のため漁業の手伝いまでするようになった人が多
いようでございます。磯廻りのうに採りや海藻採り等には一緒に船に乗つて
作業することもあります。

この様なわけで私達漁家では主婦として炊事、掃除、洗濯、裁ほう、育児
等の家庭の仕事一切と漁業や農業の仕事をしなければならず、日の長い時な
ど睡眠もせいせい5時間位しかとれません。本当に切くことでせい一杯です
。沿岸漁業の低い生産性のために生活に追われることが多いのでしよう。

また明日の生活にひびかない生活改善等のことについてはおろそかになり
がちで、こうした講習も実生活に生かすことは仲々難しいようです。従つて
婦人部の活動も効果を挙げるためには悩みも多しいろいろと社会問題等も考

へさせられます。

毎冬婦人部の共同作業として行なっておりましたふのり摘みは婦人部の大切な資金源でもあり又家計への幾らかの足しにもなっておりました。しかしこれも毎年増えて来た観光客が破のうにやあわびを探して石を転がすためか、次第に減って来ており、共同採取も以前ほど実績をあげることは難しくなつて参りました。魚も来なくなり、海藻も採れなくなつては、やはり安定性のある農作物の方にだんだん力が入らざるを得なかつたのでございます。そして昨年(38年)秋から特に組合のお骨折を戴き野菜類の集荷販売をすることになつたのでございます。

今までは野菜類の作り方もよくわからず、本当に見よう見まねの自己流で種をまいたり畑を耕したりしておりました。出来た野菜の品質も悪くその上大した収穫をあげることができませんでした。大根、人参、白菜等わずかに自家消費をしていた程度でございまして余つた野菜は豚の餌にしたり、腐らせてしまつたりで、大変不経済なことをしていたのでございます。お互いに勿体ないから何とかしようという気持は持つておりましたが、販売するにも数量がまとまらず、品質も良いものが少なかつたため利用するまでには至りませんでした。

日頃漁業組合でも婦人部活動についてはいろいろな仕事を計画されておりましたようですが仲々実施するまでには参りませんでした。

併し夏の頃か、部落の野菜を集めてみたらという話がもち上り、取りあげることになり、婦人部の仕事として組合集荷の運びとなりました。始めの頃は、大根の3本や5本では組合に持つて行くのも「めぐさい」といった気持もありましてか仲々出足がよくなかつたのですが、やはり幾らかでも売れて家計の足しになるのならという気持ちからだんだんこうすることが婦人部活動としても必要なことだと思ふようになりしました。

今では野菜の出荷も軌道に乗り、10月に始めてから15回程、大根、人参、白菜、馬鈴薯を集荷し、青森市の青果市場に出荷致しました。何分この仕事も始めて間もないことですので組合まで運んで来た野菜の数量も少く、わずかつつの出荷でした。それでも今までに5万円程も売上げることができました。

そして組合長さんを始め皆さんのお骨折りで試作農地もお借りすることができ、ここで秋には実際の農業の技術員においでを願つて野菜作りの指導を受けることができました。

この講習を受けた婦人部員は時間のたつのも忘れ、今まで経験した失敗や

ら、疑問などについてもよく話し合い、熱心に指導を受けました。それから野菜作りに本腰を入れるようになり、漁業不振のため沈滞していた中から何かしら活路を見出したような気持ちになることが出来まして、この仕事を進めて下さった組合の御指導に心から感謝しております。

そして今年も雪どけを待って今年の貴重な体験をもとに、野菜作りに励もうと思っております。

漁業婦人部でありながら野菜のことはかり申し上げて大変感謝ではございますが、私達のような漁村では、農業を兼業したり山の仕事をしたりというように変節により、環境によって多角的な仕事をしておりますので、私達の生活を向上させるためには部落内の産業を総合的に盛んにすることも大切です。

漁業組合が魚でなく野菜を集荷することは一寸向違いの様ですが、平賀農協のスーパーマーケットの例からみても新しい行き方として組合としても研究して載せたいと思います。こんなことをやって貰えるところは部落では一番頼りになるのは漁業組合でございます。野菜作りと組合集荷には婦人部として組合発展のためにも成果をあげたいと思っております。

婦人部の活動としてはいろいろ御批判も多いとは思いますが私達の野菜作りについて発表させて載せました。今後共皆様の御指導をお願い致しまして終りたいと思います。

滑車利用のり養殖について

清水川のり養殖研究会

船橋 銀 作

私は平内町清水川でのり養殖を行なっておるものであります。一昨年以來滑車を利用した、のり養殖を行なっておりますので、このことについて発表いたしたいと思ひます。

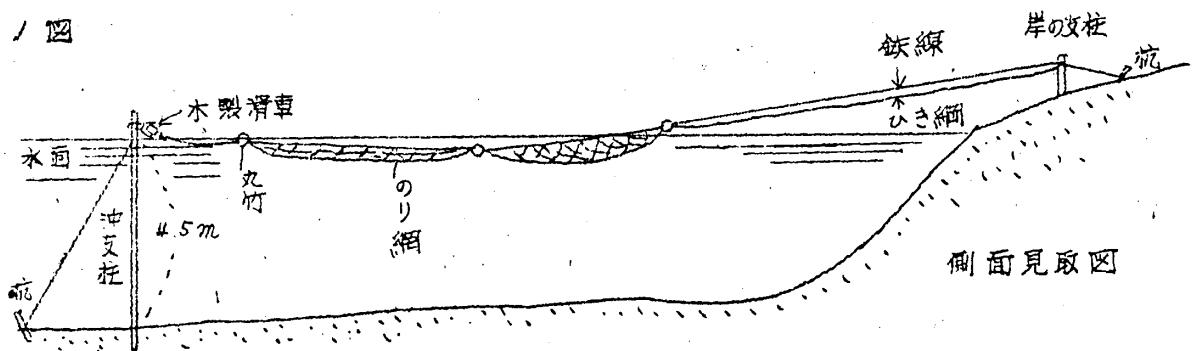
当時ののり養殖状況とこの施設を考えた動機について申しますと、

昭和36年10月に漁業組合の御援助によりまして清水川地庄に福島県松川浦から、のり網を購入し、のり養殖を始めたのであります。

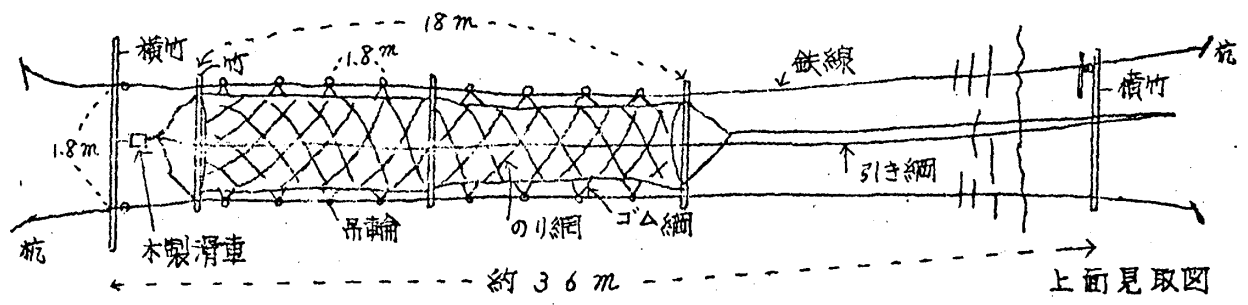
私を入れて8人、のり網80枚を固定式とベタ流しで張込みました。のり網の張込み場所は波打ちわから、少し入ると胴付長靴では作業が出来ない上、波風も強く当り、又流れ藻が沢山寄つて来るような浜で、一見のり養殖には不適當と思われれる所です。しかしこの様な悪条件にうちかつて、のり養殖ができるならば湾内でも有数なのり漁場になるだろうと、大きな希望をもつて始め、同時に私達ののり研究会も発足したのであります。私共にはなれない仕事ではありましたが種網や天候等に恵まれたためか、のりの伸びもよく、つみ取りを染しみにしておりましたところ、翌年1月2日夜の大時化ですつかり流されてしまいました。

ベタ流しも大きな時化には無理だったようです。折角の苦心も水の泡になつてしまい、のり養殖を続ける気力も失いかけておりました。この年の秋にはのりを始める人が2人も減りました。私は何とかして成功させたいものと思ひ最大の敵である時化、特に当地でいう「下やませ」(北東風)から守るため簡単な思ひつきではありますが、沖の杭から岸の杭に針金を張つて、これにのり網を取付け陸上から引寄せせることを考え、固定張の外にこの施設を作ってみました。その施設の概略を図によつて説明致しますと、1図2図のようなものであります。

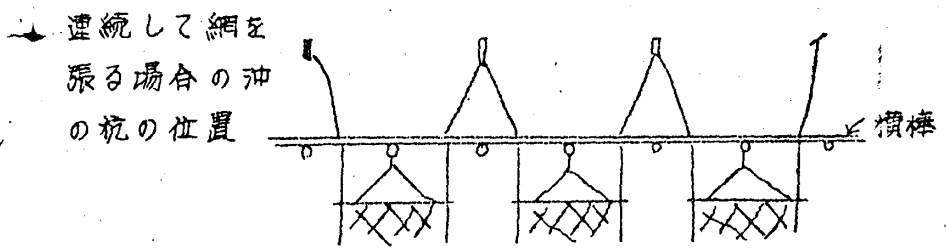
1 図



2 図



3 図



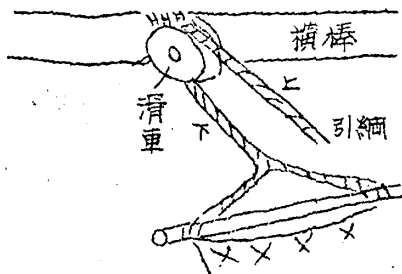
連続して網を
張る場合の沖
の杭の位置

先づ作業の順序としまして

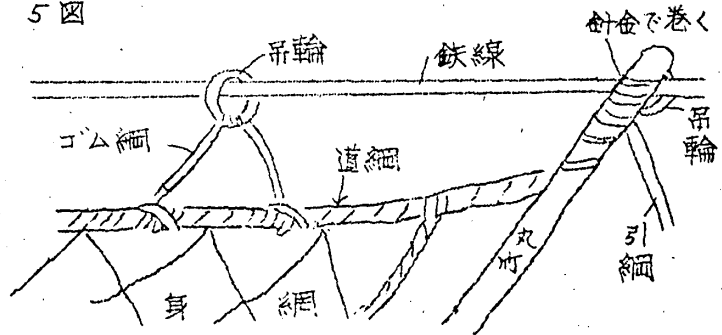
- ① 沖の支柱としてノインナ半位の鉄管6メートル(水深4メートル位の場合)を2本/組として適当な沖出しの位置に1.8メートルの幅をとり、ハンマーで打ち込み、更に鉄線で張りを取り杭を打ち、次に木製滑車を縦に固定した横棒を支柱に取り付けます。
- ② 岸の支柱として直径10cm位の丸太1.5mのものを2本、幅1.8mに打ち込み横棒を取り付け、更に張りを取ります。
- ③ 直径5cmの吊輪を8番鉄線で22ヶ作り、直径3cm、長さ1.8mの丸竹3本を用意します。
- ④ 沖の支柱に10番鉄線を2本結び、岸の支柱にまで伸ばします。
- ⑤ 吊輪を丸竹の両端に固定し網の道縄を結び沖側から順に1.8mの間隔にゴム網で吊輪を5図のように網の両側に取り付け鉄線を通して中央と最後に丸竹をつけます。
- ⑥ 最後に引綱を沖側の丸竹から滑車を通し、のり網の上を越え岸の支柱まで伸ばし、岸側の丸竹と結びます。
- ⑦ 出来上りましたら引綱を引いて滑車がよれて引綱が喰い込んだり、網が狭くなりすぎたり、鉄線のたるみが出すぎないようによく調整します。
そして平常は沖にのり網を出して引綱を岸の支柱に結っておきます。
これに使用した1組の資材は次の表のとおりであります。

資材名	数量	単価	金額	摘要
鉄管	2本	200円	400円	径1.5イナ、長さ6m厚肉 中古品
丸太	2本	150円	300円	径10cm 長さ1.5m
横丸竹	2本	50円	100円	径5cm 長さ1.8m
鉄管	1本	50円	50円	径0.8インチ 長さ80cm
杭丸太	2本	20円	40円	径10cm 長さ50cm
鉄線	100m		430円	10番線 1玉3000円、沖出30mの場合
木製滑車	1ヶ	50円	50円	車の径6cm
丸竹	3本	10円	30円	径3cm 長さ1.8m
吊輪	22ヶ	10円	220円	径5cm 8番鉄線
ゴム綱	16本	3円	48円	長さ60cm
引綱	75m		200円	3分トワイン
計			1,868円	

4図 滑車取付図



5図



操作は非常に簡単で、陸上から引綱を引くだけで必要な時に網を陸上に引揚げ時化から容易に守ることができます。

この方法によった10枚ののり網は昨年時化に合った時早く上げましたので被害を受けませんでした。

しかし残念なことに松川浦から来た網は芽付きが悪かったため収穫は少く岳頂の劣った乾のりをわづかに生産したにすぎませんでした。

昨年実施してみた結果から次のような効果があったと思います。

1. 時化の時のり網を陸上に引き上げるため、時化によるのり網の破損、流失、のりの流失、流れもの被害等を防ぐことが出来ました。
2. 網を岸に引きよせてのりをつみ取ることができるため、つみ取り作業が容易で楽になりました。
3. のり網の上げ下げが容易であるため、アオノリが発生した時の高張りや

干出時間の調整が楽です。

まだまだ研究不十分でありますので、①沖の支柱の高さの決定、②沖出しによる施設の強さと至費の問題、③沖出しによるのり網の枚数の問題、④利用地形の問題等が今後の研究の課題で、沖と岸の支柱がパイル等で十分な強さのある資材を使い、鉄線を強く張る道具等が揃えられるならば、支柱の打込み、鉄線の緊張、のり網の調整が楽に、且つ効果的に出来ることと思われ
ます。又網を岸に掲げた場合、雨や雪に当たらないような簡単な屋根掛があつた方がよいと思ひます。

尚沖の支柱を固定した浮きに換え、ベタ流し式の滑車利用も考えられますが、このことについていろいろ渠や研究所などからも御高見を載せておりますので今後このような施設の改善研究に取り組んで参りたいと思つております。何かとも皆様のお指導をお願い申しあげ、私の発表を終わります。

ヒラメ曳釣漁具の改良について

白糠小型漁船組合

東 田 貢

当白糠地区は、東通村の一番南側に位置し、村役場のあるむつ市から30数キロにおよび、戸数は538戸で、このうち89%におよぶ481戸が漁家で占められ、漁船は5トン以上の動力漁船28隻、5トン以下の動力船65隻、無動力船約500隻を有する漁村であります。

第一表は昭和37年の水揚額ですが、これをみますと、スルメイカの多いのが注目されると思いますが、スルメイカは全水揚額の70%を占め、この漁不漁が、当地区の経済を大きく左右するといつても過言ではないと思えます。

当地区の漁船漁業は、1月から5月までのマス、6月から1月までのスルメイカとなっておりますが、とくに、スルメイカに対する依存は非常に強く、この期間中は、他の漁業を営むものではないという観念が多分にあるわけであります。

スルメイカと云いませても、盛漁期として年間のスルメイカの大部分を占める月は、10月から12月の3ヶ月間であり、あとの月はあまり芳しい漁ではありませんので、小型船は別として大型船の優秀船はハブ方面へ出掛けて漁をしております。

このような漁業状況からスルメイカの盛漁期以外の月はもちろんのこと、盛漁期でもスルメイカ以外に小型漁船を利用して収入をあげる漁業はないものかと仲間の間では常日頃から話題となっておったのでありますが、このことが具体的になったのが38年の夏になつてからでした。

仲間と共にいろいろと相談した結果、7月から12月頃まで、昔から無動力船又は若干の動力船によつて月のうち何日かずつ営まれていたイワシ利用のヒラメ釣から最近、行動範囲が広く操業能率が良いということから若干の動力漁船によつて営まれて来た「ヒラメ曳釣」を本格的にやってみてはどうかということになつたわけであります。

ここに発表するのは、私が行つたヒラメ曳釣漁具の改良試験の結果であります。

私は、ヒラメ曳釣は全くの素人ですので、経験者の意見を聞いたり、私どもの仲間が38年5月に佐井方面で実習したときまとめた報告書を参考にしながら本格的に研究にとりかかったのは、38年8月末になつてからでした。

まず、最初は当地において春のマス釣に使用している大きい潜行板を利用し、佐井方面で使用している要領で、ドジョウが非常に良いということから針にドジョウをつけてやってみましたところ、ヒラメ餌付き具合は良く、この分では、ヒラメ釣も悪くはないものだと思いますながら数日を過ぎたのですが、ここに問題点が出てきたのであります。それは生餌のドジョウのことなのです。

当地では、ドジョウの入手が非常に困難であり、また、蓄養しておっても、水の関係かどうか、数日間ですんでしまうということなのであります。

ドジョウも買入れて、すぐ使用するのであれば、ヒラメの値段が高いので、餌料代としてはたいしたことはないのですが、数日も時化が続けば死んでしまうので、相当高い餌につくわけでありまして。

そこで、この生餌のドジョウを利用しなくとも、ヒラメを漁獲する方法はないものだろうか。これが次に研究課題となったのであります。

この問題が解決するとすれば、ドジョウがなくとも、いつでもヒラメ曳釣をやれることになるので、なんとしても解決したいというのが、私ばかりではなく、仲間共通の悩みとなったのです。

このとき、一つのヒントが私の頭に浮かびました。それは毎年、春のマス曳釣に使用して成果を納めている擬餌針のことなのです。

ヒラメもマス同様に、こういう漁具ではどうだろうか。マスでも良いのだからヒラメでも多分良いかも知れないという自信と不安のもとに、9月中旬になってから、水牛の砲弾型の擬餌針、当地では「角毛針」と呼んでいる、を使用して見たのです。

ところが見事に餌つきが良く、ドジョウには全々劣らず、かえって成績が良いという結果が出たのであります。

このときのよろこびは、生涯忘れることはできないでしょう。

この角毛針は、マス釣用として、当地で発明したのですが、この漁具をヒラメに使用した結果の利点としては、

1. 大型のヒラメ「最高9kg」が漁獲されること。
2. 生餌のように魚にとられたり、傷がつかないので何ノ日使用しても切れない限りは、取替える心配はなく、手間が省けること。
3. 生餌のドジョウに比して経費(2~300円程度)が少なくてすむ。

ことなどがあげられます。

仲間の間では、角ではなく、プラスチックを使用している者もあります。

その日の天候、海底の餌料関係か、角毛針に多く餌付きするときがありま

すが、こういうときは、船を少々早くするとつきが良いようであります。

次に、針も1本であれば、漁獲能率が悪いので、これを何本かつけてみてはどうかという考えから角毛針のほか、やはり、マス変釣用の擬餌イカを使用してみましたところ、これも結果が良かったので、現在は、角毛針と擬餌イカ針4本と計5本の針をとりつけ、生餌のドジョウは全々使用しておりません。

この擬餌イカも、このまま、使用したのでは、ヒラメのするどい歯のために、すぐ損傷して何日も使用できませんので、擬餌イカの先を少し切つて細い竹を入れると、ヒラメがついてはばたけば、ひとりでに、擬餌イカがテグスを伝わつて上にあがり、ヒラメは針だけを口に入れておくようになります。擬餌イカは7cmより大きいものは、潜行板に振抗がかかり、水切りが悪く餌つきが悪いようです。

また、ヒラメが、この擬餌イカに多くつくようなときは、角毛針と反対に速力を最低にして曳くと、大型のヒラメもつれるし、餌つきも良いようです。それに、その日の天候の関係上、赤が良い時もありますし、白が良いときもありますし、みかん色がよいときもありますので、いつも2~3色のものを使つていれば天候に左右されることなく漁獲できるようです。

今後は、この擬餌イカの色と水色の関係を研究したいと思っております。

このように、数本の針をつけての操作は、初めはなかなか大変でしたが、今は心配なく操作できます。それに針が数であるので簡単な針巻を作つて使用しております。

もちろん潜行板は、マス釣用のものからヒラメ変釣用として別に作成して使用しております。漁具の改良もでき、漁獲状況も良くなってきたので、自信をもって操業しておりましたが、11月上旬になったら、スルメイカが好漁となったので、漁業日誌を見て、採算上からどっちの方に主力を注いだらよいか充分検討した結果、スルメイカの高値からイカ釣の方が採算上良いという判断のもとに、11月10日をもって、38年のヒラメ変釣試験操業を打ち切り、イカ釣に専念いたしました。

それまではイカ釣に出漁しても、あまり無理しないで、ヒラメ釣をやつてきたわけです。

水揚状況については、第2表のとおりであります。22日間の操業で10万円の水揚をしました。1日平均の水揚から見れば少ないのですが、第1年度の結果としては一応成功したと思っております。

私は、この個人研究の結果をグループの会合のたびに仲間に説明したり、

また検討会を席いたりして、仲間の人でも多くが、この漁法を会得し、ヒラメ釣漁業を行なってくれることを念願しました。

その結果、15人の仲間が私と一緒に出漁し、それぞれ良い成績をおさめてくれました。

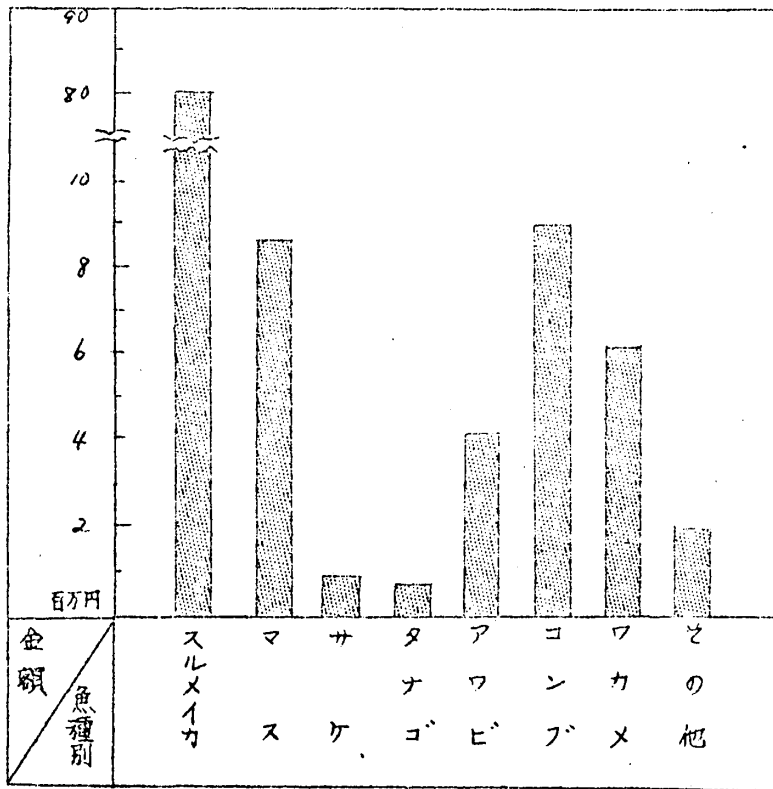
今まで、あまりにもスルメイカだけに依存して前沖に洄游してきているヒラメを、採算ベースまでもっていけないでございましたが、これも変釣漁法によって、完全な漁業として企業化までもっていったということは、私どもグループの38年の研究成果だと確信しております。

しかし、私どもとしては、これで満足しているのではありません。このほか、まだ漁具、漁法の改良すべき点があります。とくに、2段式漁法の問題等は、39年、とりあげなければならぬことです。

当沖合は三陸漁場の空虛を控えている関係からまだまだ開拓すべき漁業はあると思いますので、わがグループ員一同この研究に今後ともますます努力してまいりたいと思っております。

以上をもちまして、私の未熟な研究発表を終わりたいと思います。今後とも皆様の御指導をおねがいたします。

第1図 昭和37年度水揚額表



第 月 第 ① ②

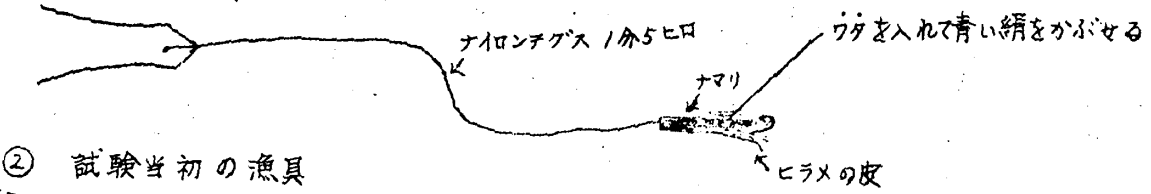
第2表

ヒラメ水揚状況 (漁業日誌より)

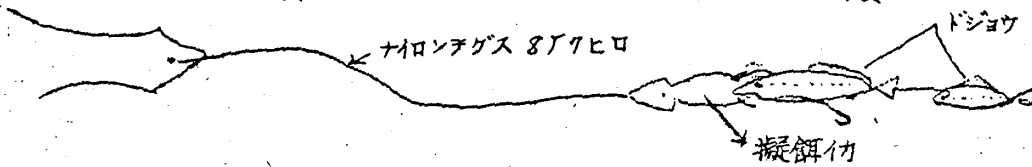
月別	世漁日数	水揚数量	水揚金額	一日最高水揚高		一日最低水揚高		一日平均水揚高		使用油	備考
				数量	金額	数量	金額	数量	金額		
9	11	281	40,800	48	8,000	11	1,500	17	3,709	2	1213円
10	7	118	38,437	59	13,283	8	1,053	27	5,491	54	(702円)
11	4	125	21,562	46	7,626	19	3,226	31	5,390	29	(377円)
計	22	594	100,799								

第1図

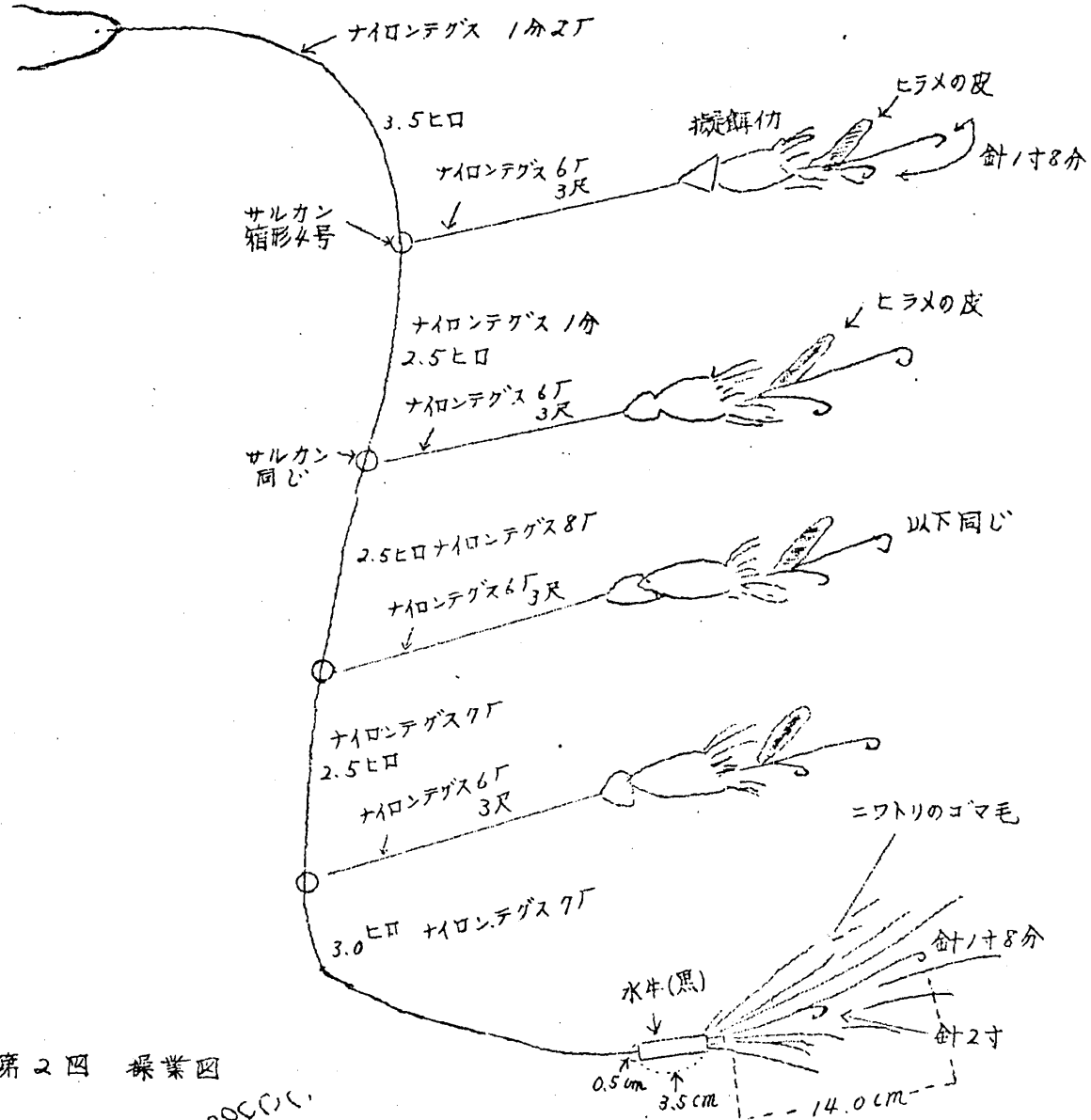
① 従来の漁具



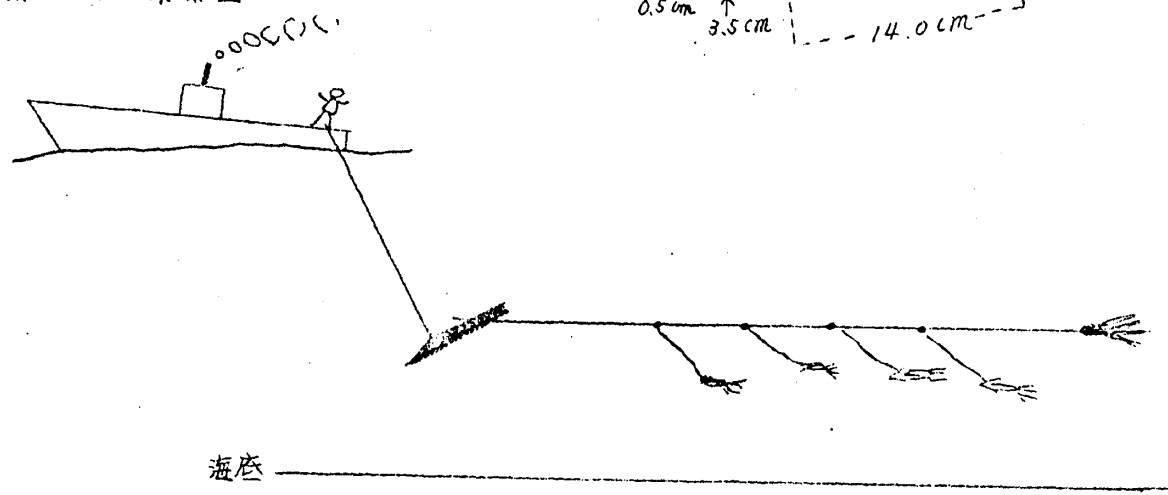
② 試験当初の漁具



③ 改良漁具



第24 操業図



八毛籠漁業について

泊漁業研究会

坂井留吉

私の住んでいる泊部落は、六ヶ所村の一番北側に位置し、戸数は631戸であるが、このうち86%におよぶ545戸は漁家で占められ、漁船は5トン以上の動力漁船40隻、5トン以下の動力船43隻、無動力船約550隻を有する漁村であります。

当部落の漁業の形態は、隣村東通村白糠部落と全く類似し、年間水揚額1億8千万円のうち、スルメイカの占める割合は約80%にも及び、当部落の経済は、このスルメイカの漁不漁によつて、大きく左右されるといっても過言ではないと思います。

昔からスルメイカの村として栄えてきた関係からスルメイカに対する依存は非常に強く、スルメイカでなければ生活できないという概念をもっている方々が多いといつても決してうそではありません。

私ども小型漁船をもっている仲間には、このようなスルメイカ依存の漁業形態を数年前から打破し、スルメイカ以外に、春のマス、秋のブリといった具合に、他漁業を兼業し漁業生産の増大につとめております。

今回発表する「八毛籠漁業」は、これらの漁業以外に、小人数で営めるもの、小資本で営めるものがほかにないものかという考えから、昔から雑延縄のみによつて漁獲されている八毛（マアナゴの方言）を岩手県で行っているような籠で営むことによつて、企業として成り立つのではないかという偶然の考えから研究にとりかかったのであります。

昭和37年夏に、岩手県大槌港へ出向いた際、先進地の方々からこの「八毛籠」について研修を受けましたので、9月中旬になつてから慣れない手つきで、籠を作成し、試験してみましたところ、三陸の海と当地の海とでは水深があわないこと、また、潮流も速いという環境の相違からはじめうちはなかなか大変でしたが、一応成果はおさめることができました。

昭和37年は1週間、38年は2週間と、操業期間はあまりにも短かつたのですが、この間の水揚状況からみて、企業として成り立つ見通しはついたわけでありませう。

それでは、これから漁具、漁法、漁期、漁場、水揚状況等について、順次御説明して参りたいと思います。

一、漁具（第1回参照）

1. 枠組 枠は円筒型で、底部には自転車の古リームを利用し、底部の直径50cm、上部で30cm、高さ6.5cmとし、10番線の針金を縦8本、8番線の針金を横3本を使用して外側端の各針金の交点を綿糸で固定する。

導入口は22cm、内側端で8cmとして、内側に向って、約20cmの上り勾配とする。

導入口は、岩手県では針金でもって形を作ってとりつけておりますが、私は、内側端の丸輪のみは針金を使用し、この輪にゴムヒモをとりつけ、そのゴムヒモの先にカギをつけて、導入口を延ばしたり、縮めたりするよう改良しました。このようにいたしますと、魚の出し入れはここからできますので、操業能率は非常にあがります。

2. 網地 サンマ棒受網(7号ノ4節)の中古品をタール染として使用します。
3. 幹縄及び枝縄 幹縄はマグロ延縄(160号)の中古品を使用し、その深度分をあけて1個ずつ結着しますが、枝縄は幹縄と同じものを使用するが、長さは5mとします。
4. 端錨 幹縄の両端には沈子として、5kg程度の鉄錨を使用します。
5. 浮子 幹縄の端の錨から深度に応じて瀬縄をつけ、この端に浮子(各8寸のガラス玉)をつけ、目印として旗をつけておきます。
6. 餌料 スルメイカ、サンマを使用します。スルメイカ、サンマとも1籠に2尾入れておきます。

7. 漁具の至費 漁具20個作成に要した費用は次のとおりです。

古リーム	20個	@ 30.-	600円
針金	22kg	@ 85.-	1,870円
古網	50k	@ 100.-	5,000円
古縄	56kg	@ 80.-	4,480円
染料	1缶	@ 450.-	450円
			計 12,400円

したがって、1個620円につきます。

二. 漁法

日没から投入して、40分~1時間位で揚げ朝まで繰り返して操業します。

私の船は、2トン半の小型漁船ですが、仕上った籠に幹縄及び枝縄をつけたものを20個積いで1人で漁場へ向いますが、漁場到着後の投籠及び

揚籠方法は普通の延縄と全く同じです。ただ揚籠の場合は、潮下より入れるようにしないと籠が積になって落ちつかなくなりますので、気をつけることです。

それから、籠に入ったハモは、死なせてしまうと値段面に影響しますので、全部生簀に入れてきます。

三、漁場及び漁期 漁場の選定は、揚籠の漁獲状況によって決めておりますが、水深7~25尋までのいろいろな場所において試験してみましたところ、時期的には水深には移動はありますが、海底が岩礁地帯の砂地が好漁場となります。それに月夜の晩は浅いところとうまくなき深いところほど良いようです。

このようなことから、ハモ籠漁業を営むには、地先の底質を知ることが、操業上最も重要なことです。

当地先のハモ漁期は、延縄等によれば、7月~12月までとなっておりますが、10月が最盛期であります。

四、水揚状況 昭和37年は、10月1週間の操業でしたが、約5万円の水揚をみましたが、38年は第1表のとおり、8、10月の2ヶ月で2週間の操業をみ、約12万円の水揚をみるという好成績でした。この日誌をみますと、9月と11月以降は全々水揚のないことは不思議と思われると思いますが、9月の場合はブリ延縄へ、11月以降はイカ釣とそれそれ転換したためであります。以上の説明で、ハモ籠漁業についておわかりになられたと思いますが、この漁業の利点は、小資本で漁具を1回準備すれば数年使用できること。したがって漁具代を水揚出来ればあとの必要経費は、油代(一晚操業すれば2000の使用)と餌料代ですみます。

この餌料もスルメイカを使用すれば自分で釣獲したものを使用するので餌料の全費を必要としないですむわけです。また操業に於て多くの人を必要とせず、1~2人で操業できること等があげられます。

当初この漁業のことを仲間に話しましたところ、全く未知のことなので不安のためか全々乗り気はありませんでしたので、私は、とりあえず自分一人でやってみたわけですが、その結果成績はよかったので、37年は一人増え、38年は6人と仲間が増えて、良い成績をおさめてくれましたのでよろこんでおります。

ただ残念なことに、ハモ籠漁業がよい成績をおさめたので、本格的にやろうとしてやっておっても、従来からやって来ているスルメイカをはじめとしてブリ漁等があれば、その方面がどうしても魅力的で、転換してしま

うという現実であります。この問題はなかなか困難で解決は難しいと思えますが、漁業日誌の記帳によつて他漁業との経営内容を分析しながら改善していきたいと思つております。

昔からハモの収入ということを全々考えていなかった当部落において、竈という導入漁具によつて企業として成りたつところまでこぎつけ、数人の操業をみるにいたつたことは、私どもグループとしての大きい成果だと確信しております。この漁業も、漁場の開拓によつて、将来はまだまだ有望視される漁業だと信じております。

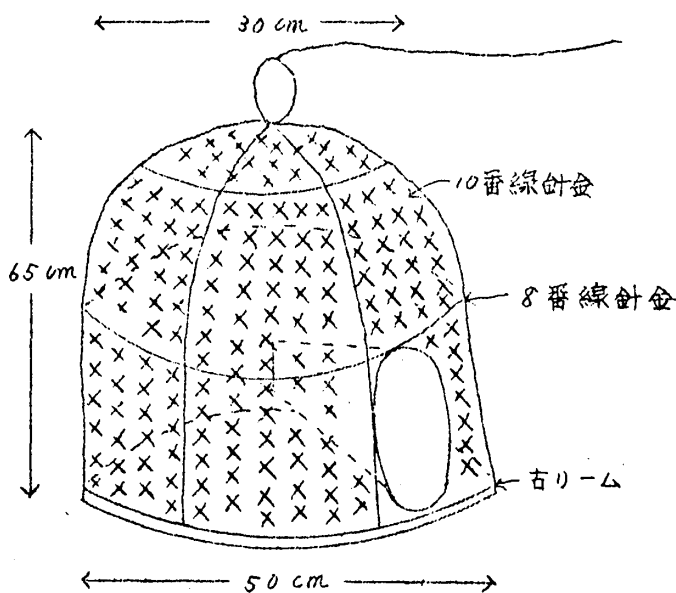
ところで私共のグループ員としては、この漁具には満足できず、一つでも多く漁具を船に積んで漁獲成績をあげたいということから「折畳式ハモ竈」の作成をしましたが、昨期的な関係から38年は試験できないでおりますが、39年はぜひ試験して成果をおさめたいと思つております。

また最近、神奈川県水産試験場においてハイゼックスパイプ利用によるハモ筒で成功したということを知っておりますが、39年はこの漁具の導入も試み、当地元における「ハモ竈漁業」を、今後ますます盛んにしていきたいと思つております。

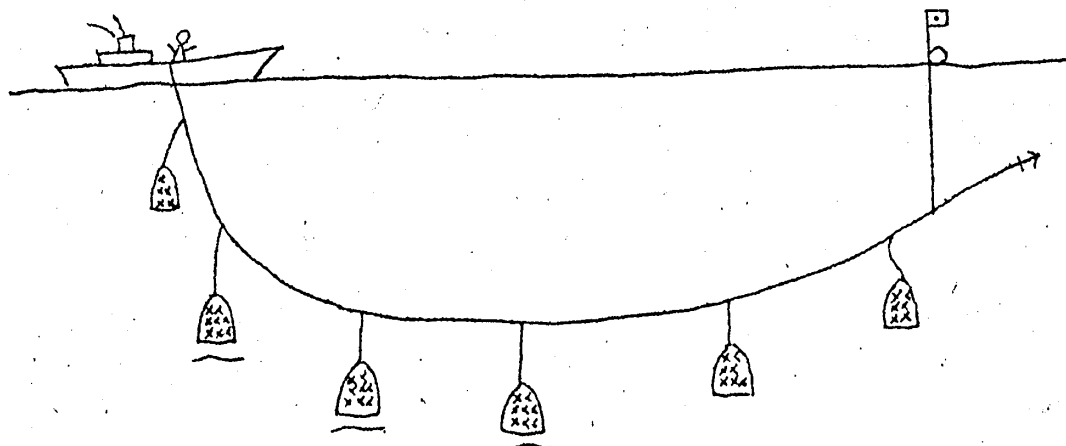
スルメイカの村として知られている泊部落も私共グループの研究成果によつて、今後ますます他漁業も発展させていただきたいとグループ員一同はりきつております。

以上をもちまして、私の未熟な発表を終わりますが、みな様のために、いくらかでも参考になれば幸だと思います。

第1図 漁具図



第2回 操業図



第1表 八毛水場状況 (漁業日誌から)

月	日	操業回数	数量	金額	月日	操業回数	数量	金額	
8	18	5回	37.7	6.750円	10	15	5回	60.0	10.250円
	19	4	50.0	9.500		20	5	67.0	11.731
	20	2	20.0	3.800		21	5	46.0	7.999
	21	4	60.0	11.600		22	4	30.0	5.400
	23	4	40.0	7.600		23	5	65.0	10.800
	25	3	30.0	5.700		24	5	60.0	10.000
	26	5	40.6	7.600		25	5	60.0	10.000
			277.7	52.550	計			388.5	66.180円
					合計			666.2	118.730

ブリー一本釣漁業を省みて

下北郡東通村尻屋

尻屋漁業研究会

1. 地区の概要

尻屋は皆様御周知の通り、下北半島の東北端に位しており、「下北見るなら尻屋へおいでよ、暗い夜空に明りはいらぬ」と東通音頭にもうたわれているように、灯台があり景勝の地として近年有名になりつつあります。

又この一帯は、魔の海としても知られていて春光のガスの多く発生する場所でもあります。しかし、太平洋と津軽海峡の海流がぶつかり合う関係上漁業資源には比較的めぐまれて来ません。

部落の戸数は57戸で、そのうち漁家戸数は40戸の半農半漁の小漁村であります。

組合員は60名で、昭和37年の販売取扱高は約1,550万円であり、小型動力船30隻、無動力船60隻を有し、主たる漁業は、海草ワカメ、フノリ、貝類アワビ、鮮魚はマス、スズキ、サメ、タイ、カレイ、その他タコ漁を行なっています。

2. ブリー一本釣を取上げた動機

太平洋と津軽海峡とに尻屋岬をはさんで漁場があり、比較的他の漁村より恵まれているとは云うもののかつては、フノリ、ゴンブ、アワビで一年を暮した程、海草も多く従ってアワビを初めとして、根付の魚の回遊も岸に近ずいたのですが、戦後年々海草は減少するし、魚も海流、潮流異変等の関係もあるのでしょうか、減少してきていて、このままでは尻屋の漁業経営は行きすまってしまうので、これを打開すべく、組合員は種々考えてこの問題ととりくんでいました。幸いにも昭和37年10月に沿岸漁業改良普及員が尻屋へ駐在したのを契機に、今年2月に漁業研究会を会員34名でもって組織発足しました。

初年度の活動方針としては、自分達の身近な問題から取りあげる様にし、漁具、漁法の導入改良研究と未開発漁場の開発発見、利用に力を注ぐことにしました。特に良い漁場を持ちながら、昔から良く自分達の知っている沿岸の近い漁場ではかり操業している、それにより沖合の漁場にはあまり出漁していませんでした。ブリーは毎年尻屋沖を回遊していることわわかっていながら、今迄これを専向に漁獲してはいなかったのも、一本釣の試験操業をする事にし、今年8月に県水産改良普及会の卒業として、ブリー

本釣の先進地である佐井村に実習のため研究会員2名を派遣して、ブリー本釣漁具、漁法を研修して来て、ある程度この漁業について、アウトラインが、わかったものの、漁場調査を完全にやっておらないために、

ヒラメ、ススキの一本釣を中止して、艇のものとも、山のものともつかない、ブリー本釣にふみされなかった。これではせっかく修得した漁具、漁法の持ち腐れになってしまう恐れがあったので研究会で、漁場発見のため集田操業する事を集会で決定し、出勤する事にしましたが、その後時化が多く従って試験操業のチャンスに恵れなかったが、10月の初旬大畑方面の漁船によって、吾々がブリーの試験操業漁場として、第一にあげていた付近にて発見されました。従って、漁港口の波が静まると共に、直に研究会員3隻を試験操業に出漁させたところ、1人で5~10kgのブリーが5~10本漁獲され予期以上の成果があがった。このために研究会員全員が出漁する様になり、漁獲能率向上のため漁具、漁法の改良研究をする動機になった訳であります。

3. 研究の経過

操業初期は佐井村で研修して来た漁具をそのまま使用しましたが、尻屋の潮流、水深、底質等の関係で種々な欠点が表われ出した。

- (1) 潮流の激しさに合せ中間のオモリが軽いため道糸が流され従って、疑餌針が底に到着する時間が長く、又感じが鈍いため、漁獲率が悪い、尚2~3人乗りの場合道糸がからまり漁獲の個人差が目立って表われるようになった。
- (2) 先糸(ヤメ糸)が細いため、サメ、イシナギ、ふぐにより切られ漁具の消耗が激しい。
- (3) 捨て針が小型できゃしゃのため8~13kgの大型ブリーが、はづれる率が高い。
- (4) 疑餌針の角の尻分け方いかんにより漁獲率が左右される。これら欠点を研究会員が、それぞれ各自沖で操業しながら、漁場に合う様に研究改良した。即ち、中間おもりを最初の3位以上の重さにした。40匁を100~150匁。
- (5) 中間オモリの重さを2~3人乗りの場合全部全じ重さにした。この結果2~3人乗っても互に道糸がからまる率が少なく、漁獲個人差も少なくなった。
- (6) 先糸(ヤメ糸)は22号~30号に、道糸は30~40号に、捨て針は18~22号より22~26号の太い針にした。

(7) 疑餌針の角の長さを長く見分けられる様に互に学んだ、これと平行して合成樹脂(パール)も多く使用した。(別四)

(8) 漁法としては佐井での実習の場合は(タグリ)を主として操業しておりますので底ノ草位よりノ5草位までの(タグリ)による漁法ですが、当地区に於いては昼夜を不問ず、凝るすれすれか、3尺位上げ上下に動かす要領にて操業しており、その方が魚型も大きく、喰いも良いようです。尚中層釣の場合は魚型は小さい。

以上の様に簡単な事はばかりなのですが、実施操業して見ると種々な問題が起きて来ます。今年よりブリ釣りを始めたばかりなのですが、皆で公用相談し合って研究改良していく事がいかに大事であるか痛感しました。

4. 研究の成果

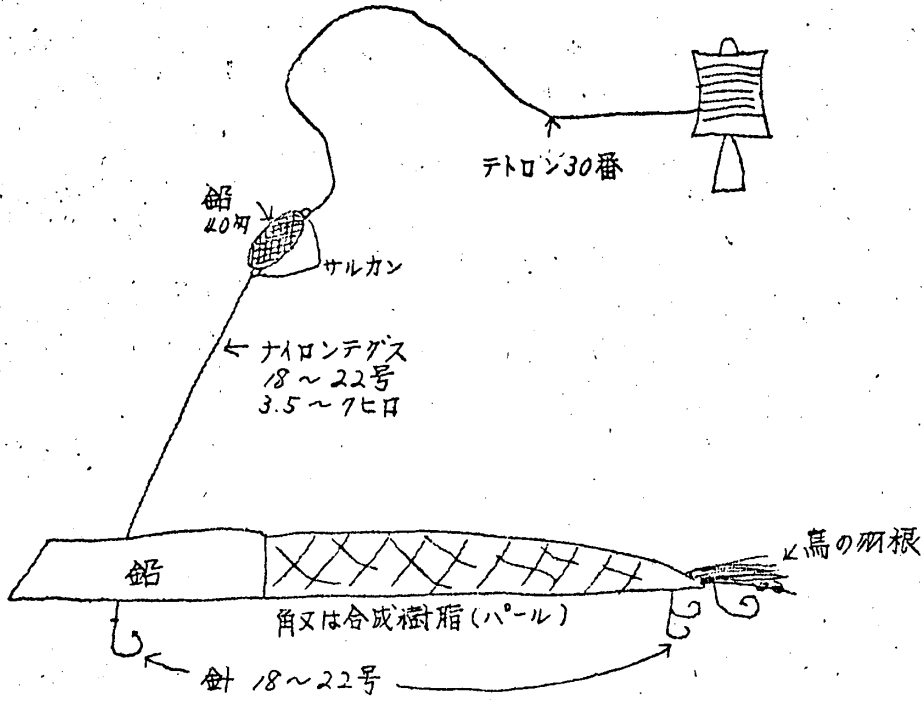
このように操業し、10月上旬より11月中旬迄での短期間ではありましたが、別表の5隻の漁獲高を見てもわかる通り、非常な好成績をあげる事が出来ました。又この期間中にブリの習性について気がついた点があったので付け加えます。10月の中旬は一般に水温が高く、中旬迄は表面水温は18℃以上ありました。この時期は非常によく釣れたのですが、水温の低下と共に喰いが悪くなり、11月の中旬になると非常に釣あげる数が少なくなりました。この時の表面水温は16℃でありました。これから考えますと尻屋沖のブリの適水温は16℃~18℃前後と恐われます。漁場の水深は60草からノ20草で深い程ブリの型が大きい。

底質は岩礁で急傾面の陸棚のへり、肩の所にブリが多く集っている様です。気象の関係では、出漁24日間の正午の、天気、風向、風速、気圧を尻屋崎灯台にお願いして、調査、検討した所、晴天に多く釣れ、一般に高気圧におおわれていた時と、低気圧通過前後が1~2日が漁が多かった。

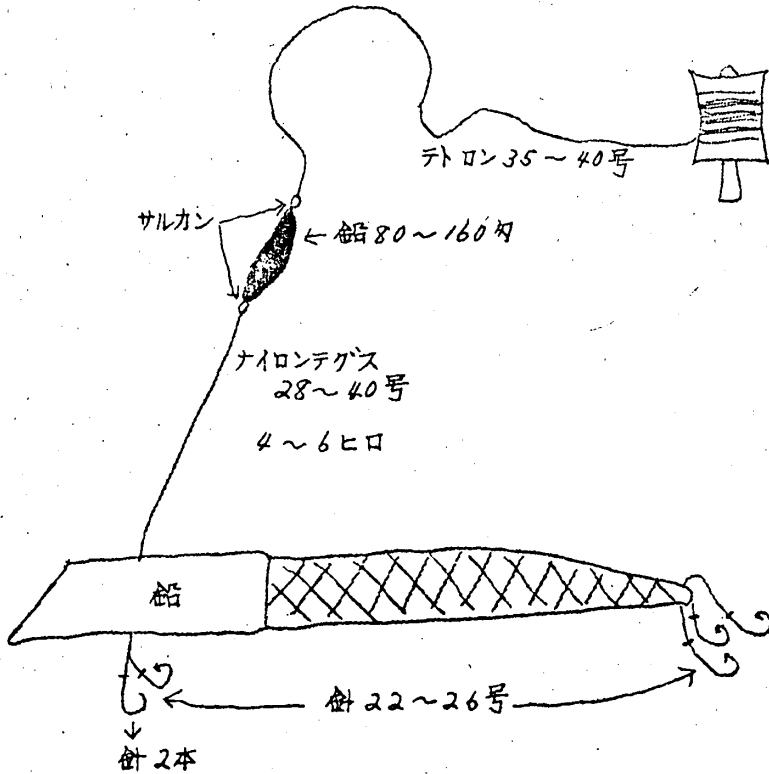
光力の強い物を好む習性があるのかと思われまます。しかし月夜の時は無灯火の船でも30~40本の水揚があり、満月の前後には多く釣れた、このことからやはり大潮、小潮回りはブリが活発に運動し餌付きが良いためであると思われました。

以上、先達地ではもうとっくにわかっている事はばかりだと思ひますが、尻屋で初めて操業したブリ漁業について発表しました。研究会も発足したばかりで、今後とも各研究会の御指導と御援助を頂き、漁場、漁具、魚の習性、回遊時期の研究を続けて行きたいと思っております。

改良前



改良後



7~
フレ
お
す
下
よ
題
崩
ま
る
あ
面
温
が
え
場
で
を
高
。無
こ
め
尻
か

出漁月日		天候	風向	風速	気圧	出漁船5隻の 漁獲尾数
10月	9日	晴	SSE	4	1020.6 ^{mb}	7尾
"	14	雨	WSW	3	1020.7	128
"	15	晴	N	5	1018.4	85
"	16	本曇	S	10	1011.4	25
"	18	快晴	NW	13	1015.4	30
"	19	晴	NNW	3	1026.3	155
"	20	"	NE	5	1020.3	44
"	21	"	NNW	10	1019.5	71
"	22	"	NW	4	1020.4	54
"	23	快晴	E	2	1025.5	51
"	24	晴	SE	2	1029.6	56
"	27	本曇	NNE	4	1018.4	20
"	28	-	-	-	-	10
11月	2	晴	NNW	7	1019.9	24
"	5	"	NW	5	1026.1	56
"	6	"	NNW	3	1023.4	26
"	7	高曇	SSE	3	1019.5	36
"	8	本曇	S	8	999.3	5
"	10	"	NNW	5	1021.6	4
"	11	高曇	SSW	6	1015.0	15
"	13	晴	WSW	6	1016.2	4
"	14	本曇	WSW	7	1014.9	4
"	15	晴	NW	13	1014.9	0
"	17	"	"	9	1021.0	1
"	18	"	"	11	1020.7	0

船名	馬力															合計						
正栄丸	6	月	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	27	28			
		日	9	2	3	4	5	6	7	8	10	11	12	13	14	17						
		本数		6	/	6	5	6	/	0	1	1	4	1							30本	
K数																						
みさき丸	6	月	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	27	28			
		日	9	2	3	4	5	6	7	8	10	11	12	13	14	17						
		本数		6	/	11	3	11	/	4	1	3	/									39本
K数																						
宏洋丸	12	月	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	27	28			
		日	9	2	3	4	5	6	7	8	10	11	12	13	14	17						
		本数		12	4	3	4	2	1	/	2	/										28本
K数																						
日伸丸	6	月	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	27	28			
		日	9	2	3	4	5	6	7	8	10	11	12	13	14	17						
		本数			30	11	12	8	2	/												63本
K数																						
源栄丸	12	月	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	27	28			
		日	9	2	3	4	5	6	7	8	10	11	12	13	14	17						
		本数			51	25	2	9	2	/	11	/										100本
K数																						
		合計	24	85	56	26	36	5	4	15	4	4	1									
正栄丸	6	月	10	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	27	28						
		日	9	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	27	28						
		本数	/	4	4	/	9	5	6	8	3	/										39本
K数																						
みさき丸	6	月	10	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	27	28						
		日	9	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	27	28						
		本数	5	47	16	3	/	15	52	11	20	9	27	13	1							209本
K数																						
宏洋丸	12	月	10	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	27	28						
		日	9	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	27	28						
		本数	/	35	4	4	/	3	30	10	10	16	12	11	2	7						144本
K数																						
日伸丸	6	月	10	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	27	28						
		日	9	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	27	28						
		本数	/	15	4	3	3	18	9	8	10	7	12	8								97本
K数																						
源栄丸	12	月	10	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	27	28						
		日	9	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	27	28						
		本数	2	46	46	10	15	/	50	8	25	16	15	20	9	3						265本
K数																						
		合計	7	128	85	25	18	30	155	44	71	54	51	56	20	10						

ウニ桁網の改良と私達グループの歩み

東津軽郡今別町大字大泊

大泊研究会

私達の住む大泊部落は津軽半島にあり、東に急斜面の山を背影にし、西に三厩村を望む津軽海峡に育てられた戸数ノ〇三戸の漁村部落であります。

私達の漁業組合は隣村母衣月部落と組織され、一本木中央漁業協同組合と称して今日までの歩みは今更私から申上げるまでもありませんが、漁村に生れ、漁村に育ち、漁業以外に何にも知らない私達の仲間さえ漁船を動力化する資金難と加えて、船入間並に船巻場のないために、失望と生活に窮迫され、季節出稼をして生計を立てなければならぬ状態でありました。

その様な時に私達に再起の夢を与えてくれたのは組合自営ウニ桁網事業でありました。組合の幹部方の熱心な話合の基に私達小型船の所有者7名の者が雇われて操業したのは昭和32年2月からでありました。

だが小型とは名ばかりのノ心内外の電気着火の漁船であり、遠浅な岩礁地帯の自然そのままを利用した船巻場だけに、秋から冬にかけての季節風には磯波が大きく漁船を出す事が出来ず、全く漁に出られない状態で、それに重なる未至験と、見たまま聞いたままの漁具使用のため、その漁獲高は窮状打用とまではいかなかったが漁民に与えた望みは大なるものでありました。

そこで漁場の調査を行い漁具漁法の改良した結果、その進歩が氷揚高に数字となって表われると共に漁業への関心が高まってまいりました。

そこに漁業改良普及員の配置と共に漁業研究会が発足し、一本釣漁法、養殖事業と指導されるにつれて、私達も前次漁業に関心が高まると共にだんだんと一生懸命になるようになりました。それでは私達の前進原動力とも云えるウニ桁網漁具の改良した点をお話ししたいと思います。

図1、は私達のウニ操業漁場でありまして、漁場の海底は岩礁、玉石、砂地と三帯に別れております。

図2、最初に使用した漁具でありまして、組合の職員方と共に蟹田方面に行き現地指導を受けて参りましたが、私達のうに操業する漁場は図1に表した通り瀬岸、玉石地帯がウニの主力漁場なので玉石が入りまして、その所には巻揚げ装置もなく、体力的にも、漁具の破損も甚しく、操業する私達の頭をなやました。

そこで私達より尤きに操業している三厩方面を視察して漁具の改良をしました。

図3. の様に前に弓を付け、潮流の抵抗を去けるために引き綱ロープをワイヤに変えると共に手巻装置を備えました。だがそれだけの改良では私達のなやみは解決する事は出来ませんでした。私達グループは将来漁民として前進するために根本的に組合と話し合をしなければならなくなったのであります。

その理由は、船体の改造、ディーゼル化と云う難問題であります。近代化を図るこそ、ウニの増獲が可能であり、あらゆる漁業へと進出し、私達が立ち直る事が出来るのであるという意見の一致を生んだ事があります。

そして3年目にして私達の念願が実現しました、私達は漁業組合の助力を得て小型発動機船も13隻とディーゼル化も進みまして前途に光明を見る事が出来ました。

図4. は改良した後の漁具であり、それは漁場にあった漁具を作った事があります。

(1) 今までの漁具の寸法を60cm縮めて1m80cmにして今まで操業する事の出来なかった瀬岸も操業する事が出来ました。

(2) 今まで一ヶ統で操業したのを動力巻揚装置により2ヶ統で操業し、増獲を図り棒力的にも半減しました。(図5)

(3) 玉石の入る事を防ぐため今まで1本のチエンを使用したのを4mmのチエンにセット足を通し2本にしました。その結果は玉石は今までの半分も入らず、それにウニの入り具合も今までとは違いなかった。この改良は私達グループが試験操業しました結果であります。玉石を防ぐ方法には、フラ綱(9本合)をセット足の変わりに使用する事も良いと思います。その欠点は玉石を除ぐにはセット足より良いと思いますがウニの収獲はおとると思われます。

漁具については資料の図6の通りであります。

今までに申し上げました改良した点も私達の経験と勘によるものであり、未知な所、まだまだ研究しなければならない点が多くあると思いますが皆様の何かつ お役に立つならば幸と存じます。

最後に私達もこれから他村のグループに負けない様に、サメの延縄、又ヒラメ、ブリ、マグロの一本釣など新漁法を導入して活躍する様、話し合っておりますが前途に横たわる問題はあまりに多く、恵まれた海峡の漁場が目の前にありながらも現在私達の持っている1屯内外の漁船では安心して操業する事が出来ない状態であり、尚加えて船入間と船巻場がないので、三厩船西

などに比較した場合出漁日数の少いのはどうしようもなく、従って漁獲の少ないのは直接私達の生計を左右しております。この解決は施設の完成と漁船の近代化を進める外なく、私達はこれに負ける事なく、漁法の研究、努力により向上させるべきと頑張っておりますので今右県当局並に各位の前一層の御指導と御援助を衷心よりお願い申し上げます。

図1. うに桁網操業漁場

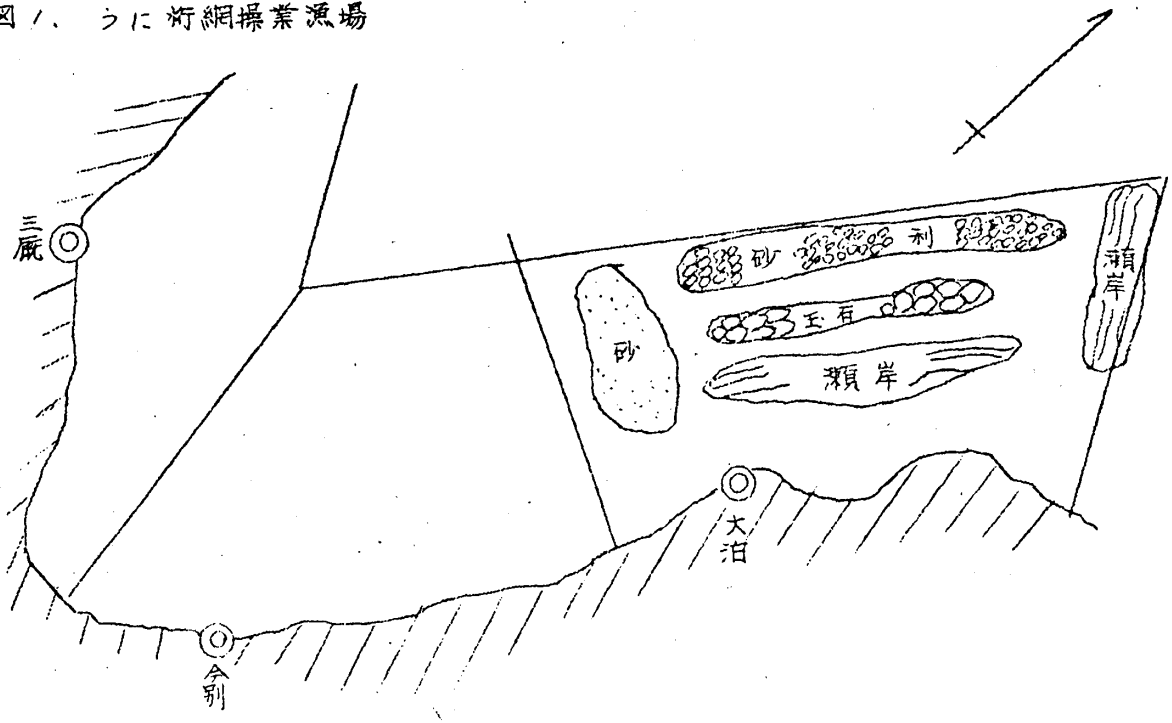
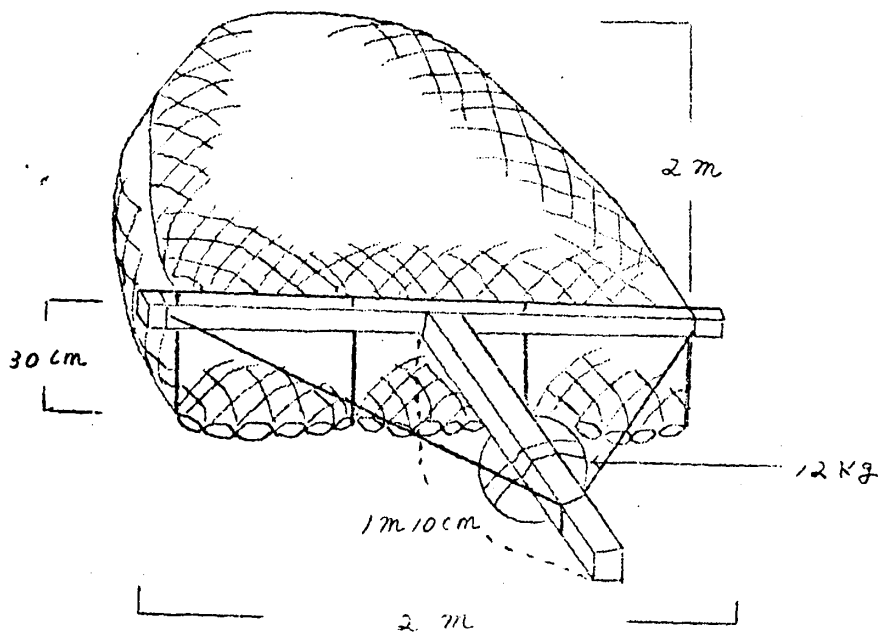


図2. うに桁網



3~
少
漁
力
層

図3 うに桁網(改良1)

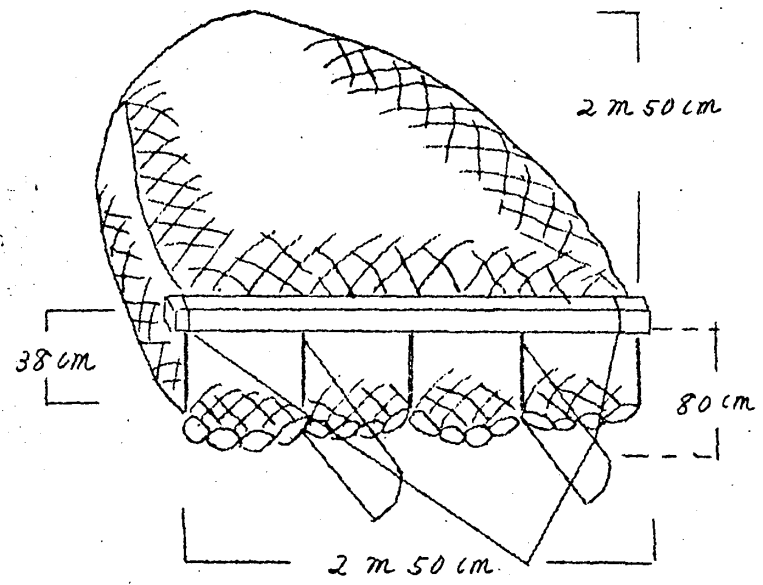
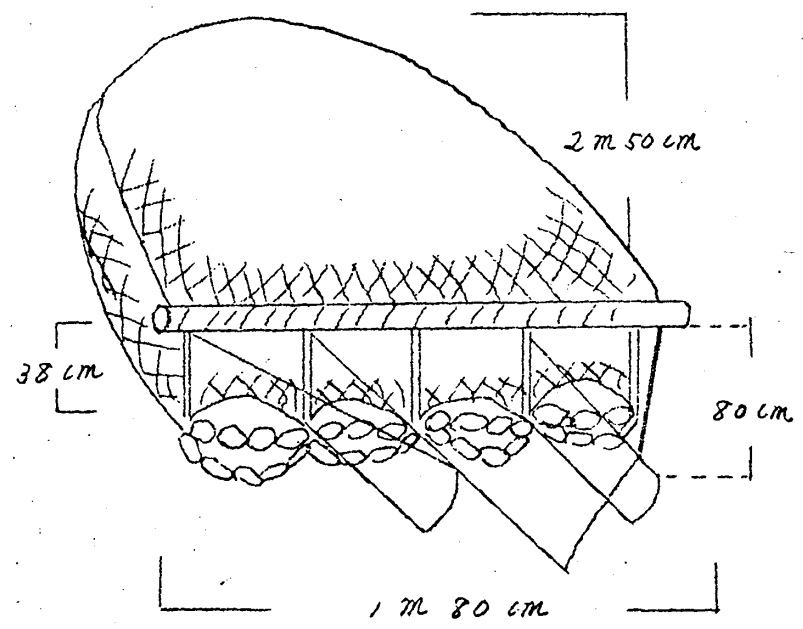
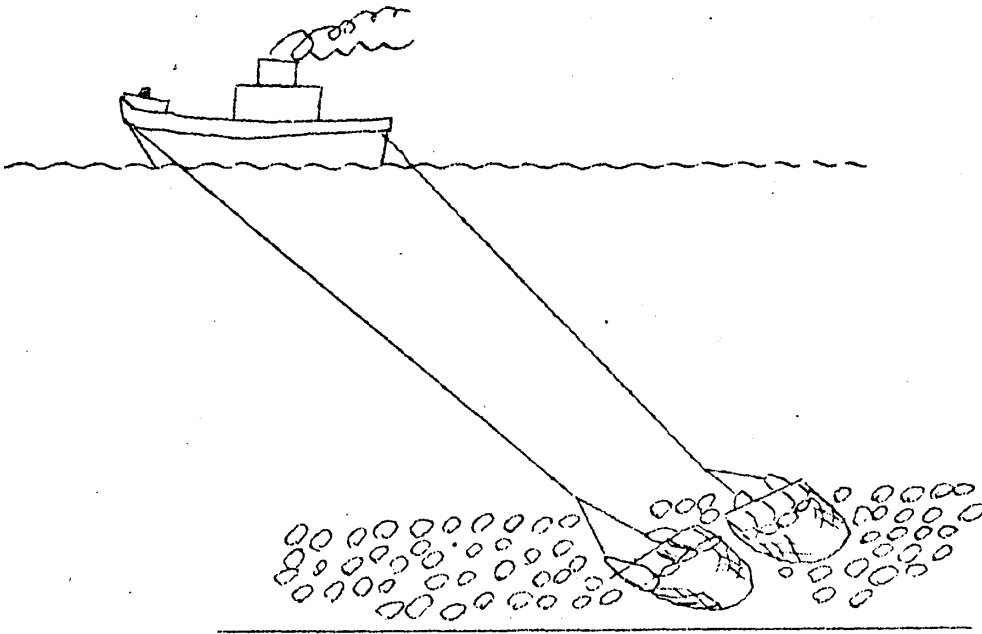


図4 うに桁網(改良2)



四 5 うに桁網2ヶ統操業図



四 6 漁具資材

品 名	区 別	数 量	金 額
銅 管	5cm 丸	1 本	} 3,500 円
つ め	1cm 5mm	5 本	
弓	1cm 5mm	2 本	
チ イ ン	1.2mm	3 m	
”	4mm	2m 50cm	
綿 糸	40号 甘	1K	500 円
”	30号	1K 5	750 円
セ ト 足	50号	30	210 円
ロ - プ	3号 5	7K 5	1,900 円

たい延縄漁業の改良について

東田沢 N. T. S 漁業研究会

米内山 松 則

1. まえがき

私達の地先では春のこうなご、夏のほたて貝、秋のいわし等を主とし、その間に、かれい、たい、あぶらめ、つぶ、うに、あわび等を漁獲しております。最近いわし、こうなごの回游も少なくなり、ほたて貝も非常に減少して参りました。そのため出稼に行く人が多くなり、残って漁業を営む人は湾内の漁業から津軽海峡方面に出て操業する人が多くなって来ました。

そして一本釣の先進地である三厩や佐井にでかケー一本釣、延縄等の漁具漁法の知識を得て何隻か出漁しておりました。

この頃私達小型船を持った有志が釣、延縄の技術を研究しようとして研究会を組織した次第であります。そして昭和37年には三厩まで参り研究会の方から一本釣の技術を教えて貰いました。こうしたことがきっかけとなり、私達の地先でも釣漁に關心を捧ぐ人が多くなって参りました。其後同年の秋に地元佐井漁業研究会長の若山さんを講師としてお迎えし、2日間に亘ってぶり、ひらめ等のへら釣、たぐり釣の講習を受けました。その時は懇切、丁寧な御指導を戴き、更に漁期になったら佐井に来て実際に釣ってみなさいと云って下さいました。翌年38年には私達夫々生活がありました。本当に意を決して佐井にも参りました。その折は技術の指導、漁具の世話等、若山さん、北野普及員さん始め皆様から大変お世話になって参りました。今達は今まで何処へ行っても釣の技術等聞いても話半分という位にしかならなくて貰えませんでした。現地ではよそ者として知られたりの経験を多く持つておりましたが、研究会としての有難さを味わった次第であります。

こうして佐井には38年4月始め油ごめの時期から行き、延縄の技術を習い、更にぶり、ひらめの釣、こうなごのたも網、たいの延縄等の指導を受け何とか自信を得ることができるようになりました。

2. 研究の動機

私達の地先には春5月から秋10月頃までたいが回游して来ます。そして大島周辺には産建網が建てられるのですが、例年餌づきする7月ごろからたい延縄も盛んに操業されるのであります。

私達が従来地元の先輩から習い覚えて行っておりました。たい延縄に佐

井に於ける研究で体験した知識を取り入れ、それが湾内と津軽海峡ではどのような差異があるか、更に漁獲効果を挙げるためにはどうしたらよいか試験してみたいと思いました。

私達が研究した漁具は既に使用している処もあるかも知れませんが、先達地の皆さんからいろいろ御批判と御指導を賜りたいと思ひ研究の結果を発表させて貰います。

3. 研究内容

先づ湾内、湾外と操業している漁場の特質と、たいの習性を考えてみました。

たいは何でも喰うし、喰いついた時の力も強い、併し非常に神経が鋭敏で物に恐れ易く逃げ足も早いと云われております。用心深い魚ですから、出来るだけ漁具は目立たない方がよいわけです。

幹繩 ヤメも細く又生の白い綿糸も目立たないように染色（実際には青色に染色した）した方がよいのではないかと考えられ、極く当り前のようなことですが、糸の細さがどの程度まで魚の強さに耐えるか、そして深さや潮の異った、湾内と津軽海峡とではどう違ふか、比較しながら試験してみました。

(1) 私達佐井に出漁いたしました会員6名（内2名は都合によつて途中中止）が、夫々38年7月から佐井沖で操業し従来の漁具を使った（A）場合と改良漁具（B）を用い比較操業を繰返しました、続けて操業した結果は平均して次の表程度の好成績でありました。この表は7月中旬の2日間を計量してみた数字です。

漁具の取扱上では特に難易は感じませんでした。

表1

	漁具 (A)	漁具 (B)
幹 繩	綿糸 25号	綿糸 20号
ヤ メ	テグス 12号 10尺	青色染色テグス 12号 10尺
ヤメの間隔	25尺	25尺
釣 鉤	たい針寸5	たい針寸5
餌	るっ ニつ切り	るっ ニつ切り
第1日目の漁獲高	6kg	38kg
第2日目の "	7kg	29kg

(2) 又湾内では海峡とは汐の強さも弱く、水深も浅いので更に細い糸が使

37～
どの
か試

、先
結果を

みま

鋭敏
ら、

こは青
りよう
く深さ
食して

全中中
(A)
紫した
中旬の

0尺

K子
K子

糸が使

えることが推測されますので、佐井沖による試験と同様に7月から会員6名が手分けして湾内の漁場でBの漁具と更に幹繩をクレモナ10号を用いた漁具(C)を使って比較操業を続けてみました。そして7月中旬の2日間に次のような成績を得ました。期間中の漁獲高はこの成績に近く、一応確信を得た次第であります。

表2

	漁 具 (B)	漁 具 (C)
幹 繩	綿糸20号	クレモナ10号
ヤ X	青染色テグス12号10尺	青染色テグス12号10尺
ヤ X の 間 隔	25尺	25尺
鈎 鈎	たい針寸5	たい針寸5
餌	るっ ニっ切り	るっ ニっ切り
第1日目の漁獲高	12 K子	26 K子
第2日目の "	8 K子	21 K子

(3) 以上のような漁具の改良と同時に餌についても当地でたい餌として以前から使っておりまするっを佐井沖で使ってみました。

佐井でよく使われているおおなご等に劣らなかつたと思います。私達としては餌の入手の点又手なれた点でよりよい結果が生れたと思っております。

4. 今後の研究課題

湾内又海峡で操業する場合、地元の漁をよく知ることと、たいの習性、回游を熟知して、それに合わせた漁具と漁法を研究することが大切なことと思われ今後も引続き研究して行きたいと思っております。

(1) 鈎鈎の検討

糸を染色し、細くした考えから当然針についてもこの考えが必要と思う。

(2) 餌の問題

私達の使っているるっは油が多いものですからすぐ変敗しせいぜい2日前位しか保持できず、又他の餌とちがい死んでは何の価値もないものでありますので多量に長時間の貯蔵が出来ることが必要と思えます。

餌の供給のため私達はるっを取りにわざわざ兼田天まで引返しているものでこうした労力も不経済なことと思えます。

(3) 船形の問題

操業してみても大きな問題として海峡で釣延縄を行うためには湾内の船の形では無理で改造する必要がある。

これは将来集団操業方式により操業をして行くためには必要になってくる事であろうと思います。

5. 結び

以上の研究によりまして表のような漁獲結果を得ましたが、矢張り実際には糸の細い程喰い付きがよく魚体も大きいのが目立っておりました。又糸は生地のままより水の色に近い色として青に染色した方がよかったです。

この研究はまだ不十分で今後の研究にまたなければならぬ点も多いので、更に続けて参りたいと思っております。皆様の御指導をお願い申し上げます。

尚私達研究会員を御指導下され、又御世話下さいました佐井、三厩の皆様がこの席をおかりし心から御礼申し上げ私の発表を終ります。

私達の歩み

福浦水産研究会

会長 田 中 太 吉

はじめに

今度の研究発表に際して出席出来又発表得た事を皆様に感謝致すと共に普及会の一員として喜びに堪えない次第です。研究発表として完成された点がありませんので現在迄私達の歩んで来た事を申述べて見ます。

私達の部落は下北半島の西部佐井村であり、本村より南へ約15K程離れた処で山は海岸迄突出して水深は急激に深度を増し、港は西南に面し、季節風を真受けて冬期間は出漁出来ない日数が多い状態です。

戸数59戸、佐井村漁業協同組合福浦出張所であり組合員52名、小型動力漁船数33隻、無動力漁船数23隻、小型定置期間的なものを含めて、延年間40統以上、年間水揚高約3千万円と純漁村であります。

社会経済交流は青森市地区を海上運管をもって行われる地域的不便な環境にあります。夏期には天然記念物名所奇勝佛ヶ浦見物の入陸と接するのみであります。

動 機

戦後の漁獲、海藻の減産により年次生活も困窮し最低生活も困難になり、出稼等が多くなって来ましたが、昭和35年度よりの小女魚の回游を見てより生産が増大し、36年、37年と続き増収を見るに至って様々にして小型動力漁船が年次建造されました。

昭和36年度に水揚荷捌所が設置され流通面に多大の利益があり、鮮魚は約30%の単価を向上させる事が出来ました、生産意欲の向上と併せて小女魚の生産と定置による依存度には今後の対策としては生活の安定を期する事が出来ず、如何にすべきかと青年達の話題でありました。再度話し合いをしていく内に壮年の話題ともなり遂に他地の研究会を学び、昭和37年度に研究会を青壮年をもって結成し、会長以下14名で福浦水産研究会を発足して普及員さんの処に行き普及会に加入致したのです。

活 動

私達の研究は個人的な事が多かったのですが研究会発足後は会合の機会を多くし自分達の知識を話し合う事再度、その内に今迄の個々の研究を整理してみた結果一本釣漁業、定置漁業の二本建ての研究テーマにし分担を定めて行う事に致しました。

他地区の研究會と技術交流し、漁法の導入に努力し、季節的には全具漁法の改善研究を行いました。

魚族はぶり、ひらめ、たい、ます、油ごめと範圍を広く求めたのは一本釣漁場に近く期間的にも利用度が長い幸でした。

当村駐在の普及員及び水産係と一緒に漁場調査指導を受け、特に一本釣漁業の研究が進められて定置漁業の不振に対しての対策が明るくなって居ります。

漁場の選定に研究され年次沖合にと進んで居ります。昭和35年度は生産高約2千万円、36年度は2千200万円、37年度は台風による定置の被害がありましたが生産高2千500万円、38年度は例年より回游魚が少なかったのですが生産高3千万円と向上致しています。

昭和35年より37年迄の主魚獲は小女魚及び捨いかが生産高の約80%を示して居りましたが昭和38年度にはぶり、ひらめ、ます、すすき、たい、油ごめが約55%を示しており、漁業形態の変化が見受けられ研究結果が成績を上げて来ている次第であり、私達も研究心を一段高めているのです。

課 題

一本釣漁法として当地には一定された期間より餌を求めることが出来ないで当村に研究されている擬餌針を使用し、角、ベークライトを主として其の日の天候、時間、潮流と魚族の習性に適しているか、又釣糸の操作等について特に研究を進めて来ました。

現在は今迄の漁法より一歩進んだ方法を研究されています。定置漁法としては漁場の選定及び網の建込方法について研究を進めている、定置としては小女魚、捨いかであり特に小女魚の場合は特別時間と網の染方に関係あり研究が行われています。昨年よりの敷網漁業法を今後の方針に重点を置く予定でいます。

目標

漁村の私達としては将来他産業と同様の近代化され、又考える漁民となるため建設し明るい部を築きたいと存じています。方法としては小型漁船を大型化し津堅海峡一円を操業し得ることです。

又回游した小女魚、夏いか等の共同加工場にての生産出荷、季節風に耐える漁港整備及び船揚場等であります。近年増殖して来ている若布、昆布等の人的養護、計画的採取による加工等です。

一例ですが4月~6月迄の小女魚の回游の期間に天候不順による漁獲制限の問題等は金額にしても数千万円に達している現状です。

41～
漁法
本釣
釣漁
りま
生産
の被
少な
。0%
たい
果が
。ない
て其
年につ
去とし
しては
あり研
く予定
となる
漁船を
に耐え
祈禱の
獲制限

～42～

経済不振の漁家に残念に思っています。私達に出来るのは労力のみであります。漁村の発展の爲には長期計画の必要と忍耐、努力が要求されると存じていますが研究会員は建設又は技術を修得し、実行出来る人になる覚悟です。

現在国、県、村と私達の振興の爲に愛の手をのべて来ている時に対し一層努力し漁村の青壮年の責務を果たす覚悟ですから今後御指導の程をお願い致し今度の発表を終らせて頂きます。

以上

尻屋沖ブリ漁場について

大商漁業研究会

泉 徳 実

尻屋沖では、昨年（昭和38年）の10月初旬から11月末にかけて、大商町、風間浦村、大畑町および東通村の総計200隻余りの小型漁船により、ブリ釣が行なわれ、2ヶ月間で約200トン、金額にして4,000万円に達する水揚がありました。

漁場は尻屋崎東方4裡~5裡のところと、同じく尻屋崎北方5裡~8裡のどちらも水深100m~150mのところと、以前は両漁場とも全くブリが漁獲されたことがないところとあります。

いわはブリの新漁場が発見された訳ではありますが、これはこれらの漁場が小型漁船にとって相当沖合であるため、従来はこれらの場所で操業する漁船が少なかったためブリが年々回遊して来ているかも知れないのに、誰れも知らなかったためとも思われます。

たまたま、10月初めに下風呂の一漁業者がこれらの漁場へヒラメ釣りに行ったところ、ブリが漁獲されたことが知れわたり、多数の漁船が出漁して空前のブリ豊漁となった訳であります。

第1表 尻屋近海のブリ漁獲量 昭和38年

	大商町	風間浦村	大畑町	東通村	計
10月	38.8トン 9,646千円	53.8トン 11,346千円	45.0トン 10,117千円	5.2トン 1,404千円	142.8トン 32,513千円
11月	35.7 8,790	11.6 2,699	6.4 1,359	3.3 1,195	57.0 14,043
計	74.5 18,436	65.4 14,045	51.4 11,476	8.5 2,599	199.8 46,556
単 価	k当り248円	215	223	298	234

注、大商町、風間浦村の他には地元で漁獲したものも含まれている。

私は3トン20馬力の漁船で大商近海において主としてマグロ釣りしている者であります。10月に入ってからマグロが薄くなり、尻屋沖でブリ大漁だという話を聞いたので、早速乗組員2人と共に尻屋沖へ行ってブリ釣りをしましたので、僭越ではありますがその状況をお伝えして皆様の御参考に供したいと思っております。また当地担当の山形普及員から尻屋近海の海況資料の

提供を受けましたので、新漁場の海況の一端を申上げて皆様の高見を乞いたいと思います。

また私は昨年9月小型魚探を装備しましたが、魚探はブリ釣り用には非常に有益でした。というのは、尻矢沖ではブリは水深100m~150mの範囲に限られて釣れ、しかもこのような水深の場所は割合狭く帯状に海岸と並行しており、少しでも沖へ外れれば一挙に300m~400mの深みに落ち込んだり、向へ入れは同様にブリ漁場から外れるのですが、魚探を使用することにより、無駄なくブリ棲息場所を探し当てて操業することができたからです。魚探使用の結果分かったことは、水深120m附近が最もよくブリが釣れることと、小型魚探でも100m以深のブリ魚群が海をからかすかに離れている状態が写ることであります。

漁具及び漁法は全船とも殆んど同じで、釣針は角または合成樹脂と鉛とを連結した—普通我々が單艦と呼んでいる擬餌鉤で、夜糸はナイロン30号5m~15m、中間鍾りは潮流によって一致しませんが100g~2,000g、道糸はテトロン30号200m~300mのものを1人1揃いもつて、釣針を海をから1m~2m離してしゃくったり、或いは海をから10m~20m手繰ったりして釣る方法で県下各地で行われている漁法と同じであります。ただここではモウカザメやその他の大型のサメがいて釣針を取られるので手繰を何本か余分に用意する必要があります。

尻矢岬北方の漁場は東方の漁場に較べて範囲はかなり広いようですが、潮流の変化が激しく、しかも二重潮になることが多くて操業上困難を伴うので東方の漁場が余計利用されました。そこで主に東方の漁場について申し上げてみたいと思います。

この漁場は、海図(6075津軽海峡水深図1:220,000)で見ると、水深120m~400mの等深線が陸地に何かって舌状に迫っているところの先端附近に当っており、120m以浅では海をの傾斜が緩やかであります。120mから急に傾斜が急になり、摺鉢状に400m~500mの深みへ落ち込んで行くその落ち際に当って弧を画いたり、100m~150mのブリ棲息適地はそこを中心として南北に細長く続いております。山目を立てて海図と照合したところ、やはり摺鉢の縁立に当る附近が最も良い漁場のものであります。底質は砂で、ところどころにイシナギのついでいる根があり、砂地には体長20cmばかりのイカナゴ—通称オオナゴが群棲しているらしく、釣り上げられたブリから生きたままのものが吐き出されたり、ときには釣針にかかって来たりします。またときには6kg以上のヒラメ

3-
大
より
可に
理の
りが
場が
漁船
も知
りに
して
トン
十円
3
6
4
てい
り大
り釣
参考
資料の

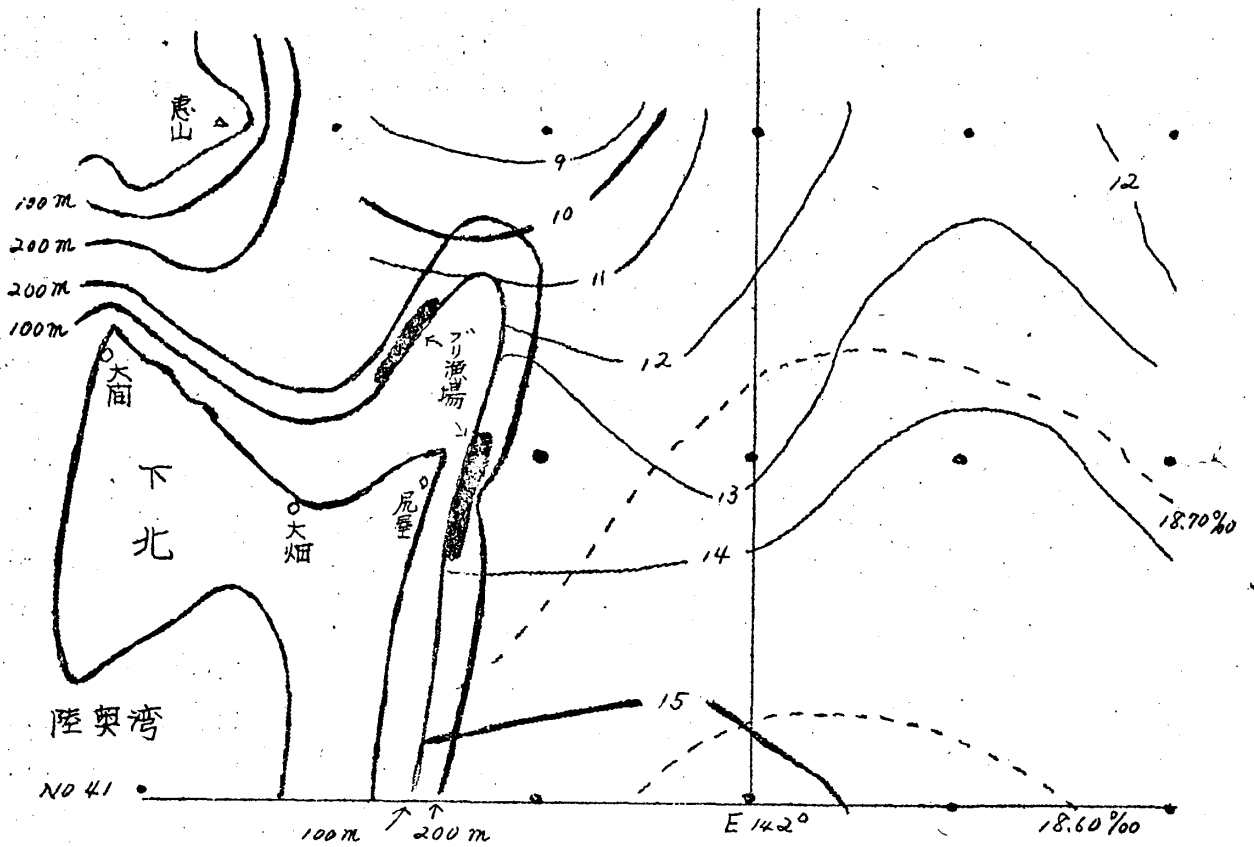
ヤミズダゴおよびアンコウなども釣れるところでした。

釣れてくるブリの大きさは4kg~10kg以上のものまでありますが、一般に100m附近のものは小さく、深みのもの程大型で、多く獲れるのは6kg~8kgのもので、大きいものでは12kg~15kgのものもときどき釣れます。佐井・大筒、下風呂沖でもブリは獲れますが、せいぜい6kg止りで、尻屋沖のブリは特別大きく、また値段も着しく高かった訳であります。

日の出前の東の空が明るくなり始める頃から日が昇るまでの間はブリの喰い付が非常によく、薄暗いうちは水深100m位で釣れ始め、だんだん明るくなるに従って沖の深みが釣れるようになるため、各船とも沖へ移動して操業し、日の出後は急に喰いが悪くなり、日中は散発的にしか釣れなくなり、夕方になって日没前にまた喰いが良く、このときは朝と反対に沖から岡の方へ喰いが移り、日没後もまた喰いが止るといった具合で、日の出前および日没前の好機には附近一帯の各船とも一斉にブリを釣り上げて壯観であります。しかし残念なことには、このような時間は非常に短く、釣針は1人で1本より下げてなく、また水深は100m以上もあり、海底へ釣針を下すのに1分以上もかかり、ブリを喰わせてから船上へ引上げるのに5分以上もかかるような具合でせいぜい1人で3尾~5尾釣り上げれば喰い付きがはったり止まるという状態の日が多いのであります。

しかしその日によっては、日中または夜間数時間に亘って喰いが続き、このような時は決して附近一帯の全船が大漁します。一般に干潮から満潮に向うときに喰いが良く、また気圧が近くにある場合に大漁するようではありますが、何が漁の原因になるかは分かりません。

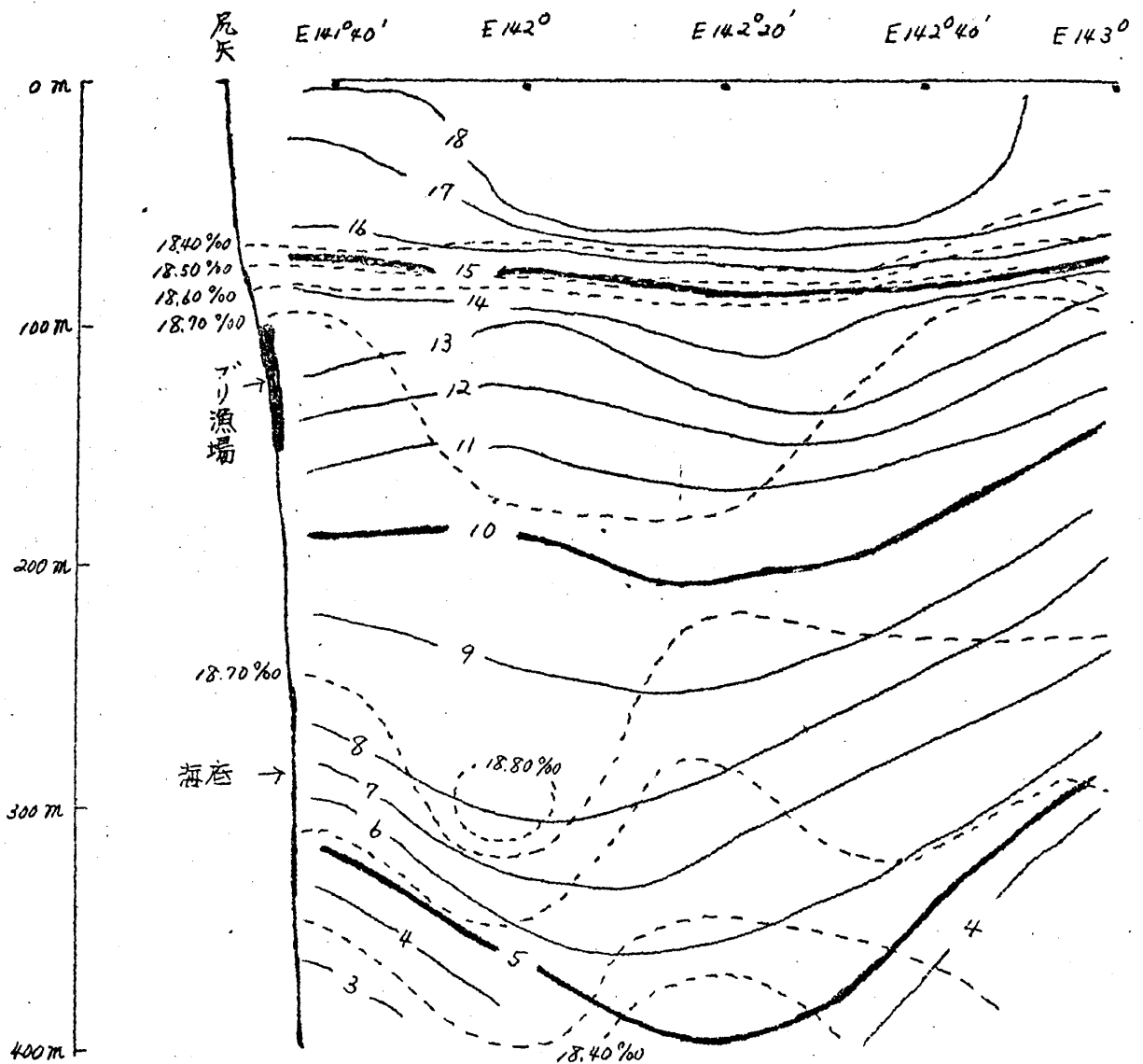
次ぎに尻屋沖海の海洋観測資料からブリ漁場の環境その他を検討してみたいと思います。



尻丈近海の水温、塩素量水平分布

第1図(100m層 38.10.4~9調 ・印観測点)

ブリ盛漁期中の水深100m層の水温および塩素量の水平分布状態および同時期の尻丈東方の水温および塩素量の垂直分布状態は、それぞれ(第1図、第2図)に示すとおりであります。これらからブリ漁場は水温11°C~14°C、塩素量18.70‰内外の水塊によって占められていたことがわかります。



第2四 尾天岬東方水温、塩素量垂直分析 (38, 10, 9)

文献(ブリ漁業の展望 青森県漁政課編)によれば、ブリ成魚の適水温は14°C~17°Cとなっており、尾天沖の場合と大分異つて興味あることでもあります。

もともと利用させて頂いている観測資料は、直接ブリ漁場調査のためのものではなく、青森県水産試験場が定期に実施している奥山東方・尾天東方および北緯41°線上に20哩間隔毎に設けられた定点観測資料で、ブリ漁場に最も近い観測点(北緯41°25' 東経141°40')でもブリ漁場とは4哩程離れた洋上に設けられた点ですが、ブリ漁場は大陸棚の一部、特に大陸斜面の上部に位置して水温等の変化に富んでいるかも知れないので、観測資

料を直ちにブリ漁場へ当てはめるのは、多少の危険を伴なうことかも知れませんが、盛漁期におけるブリ漁場近傍の水温、塩素量としてみても、かなり有意義であると思つて持出した訳であります。以下このことを念頭において話を進めて参りたいと思つています。

先づ考えられることは、昨年9月以降何時頃からブリが来遊しておつたかということでありませう。

昨年は7月から11月までの間に4回観測してありますので、これらの資料からブリ漁場近傍の海況の変化の具合を調べてみますと(第3図)、水深100m~150mのブリ釣獲可能範囲において、7月では10°C以下で先づ期待できさうもなく、9月は10月と大差なくてブリの来遊を期待してよさうであり、8月の観測資料のないのが残念であります。7月と9月との中間位と推定すれば、8月中旬~下旬にはブリは姿を見せていたのではなからうかと考えられます。またこの図では10月と11月とは塩素量においては多少の変化が見られますが、水温においては大差なく、10月一杯と11月前半にかけて豊漁の日が多かつたことと一致しております。

次に昭和37年との比較を、両年の7月~11月の同一地点における海況について比較検討してみますと(第4図)、昭和37年においては9、10、11月とも100m層~150m層は15°C~18°Cの水塊によつて占められ、8月においてやや似た海況が出現してはいますが、短期間で、全般に昭和38年よりも水温が着しく高かつたことが示されております。

昭和34年から昭和38年まで毎年10月初旬頃に実施したブリ漁場に近い北緯41°25' 東経141°40'における観測資料がありますので、水深別に水温、塩素量を比較したのがこの図(第5図)のとおりであります。このなかでブリと関係の深い100m層および150m層をそれぞれ各年毎に比較してみました。(第2表)。すると、塩素量においては各年とも大差ありませんが、水温においては昨年が非常に低かつたことがわかります。

100m層においては過去4ケ年中一番低かつた昭和34年よりも更に3.2°C低く、また150m層においても5ケ年中最低で、平均値より2.5°Cも低くなつております。これらのことを考えますと、昨年のブリ大漁は、この異常な水温と深い関係があるのではないかとも思われます。

温は
とで
のも
方お
漁場
4理
大陸
観測資

第2表 各年の10月初旬の水溫、塩素量比較表
(尻屋沖ブリ漁場附近)

		34年	35年	36年	37年	38年	平均
水 温	100m	17.1	17.2	17.2	18.3	13.9	16.74
	偏差	+0.4	+0.5	+0.5	+1.6	-2.8	
	150m	14.1	15.6	11.6	15.0	11.0*	13.46
	偏差	+0.6	+2.1	-1.9	+1.5	-2.5	
塩 素 量	100m	18.82	欠	18.80	18.62	18.74	18.74
	偏差	+0.08	測	+0.06	-0.12	0	
	150m	18.58	欠	18.79	18.81	18.72*	18.73
	偏差	-0.15	測	+0.06	+0.08	-0.01	

※推定値

なお、昨年(昭和37年)の各月毎および過去5ヶ年間の10月初旬における水深別水溫、塩素量比較図を水系判定その他の参考のためここに掲げました。(第6図、第7図)

以上申し上げた結果や今までのブリ漁業はじめ各種漁業の経験から、今後の尻屋沖ブリ漁業の対策として、次のことが考えられそうです。

昭和36年12月に大瀬沖でブリが大漁し、その後ずつと良い漁がなかったこと、および昨年(昭和37年)の海況が異常だったことなどから考えて、尻屋沖に毎年大きな期待を寄せるとは出来ないのではないかとということと、もう一つは海は年々、月々に大きく変化するものと考えらるべきで、我々漁業者は直接目に見えない海中のことや、海底の状況を常に知る必要があると思います。又尻屋沖附近は、大陸棚が北方へ遠く突出しており、海峡西方からの津軽暖流および東方～北方からの親潮系海流の流入によって変化に富んだところがありますので、この近海の大陸棚縁辺を探すならば、その年々の海況に従って、ブリ好漁場を各所に見付け出すことが出来るかも知れません。

要するに我々漁業者は生活の場である海について、常に新しい知識をもち、現状を的確に把握するように努力しなければならないと思います。

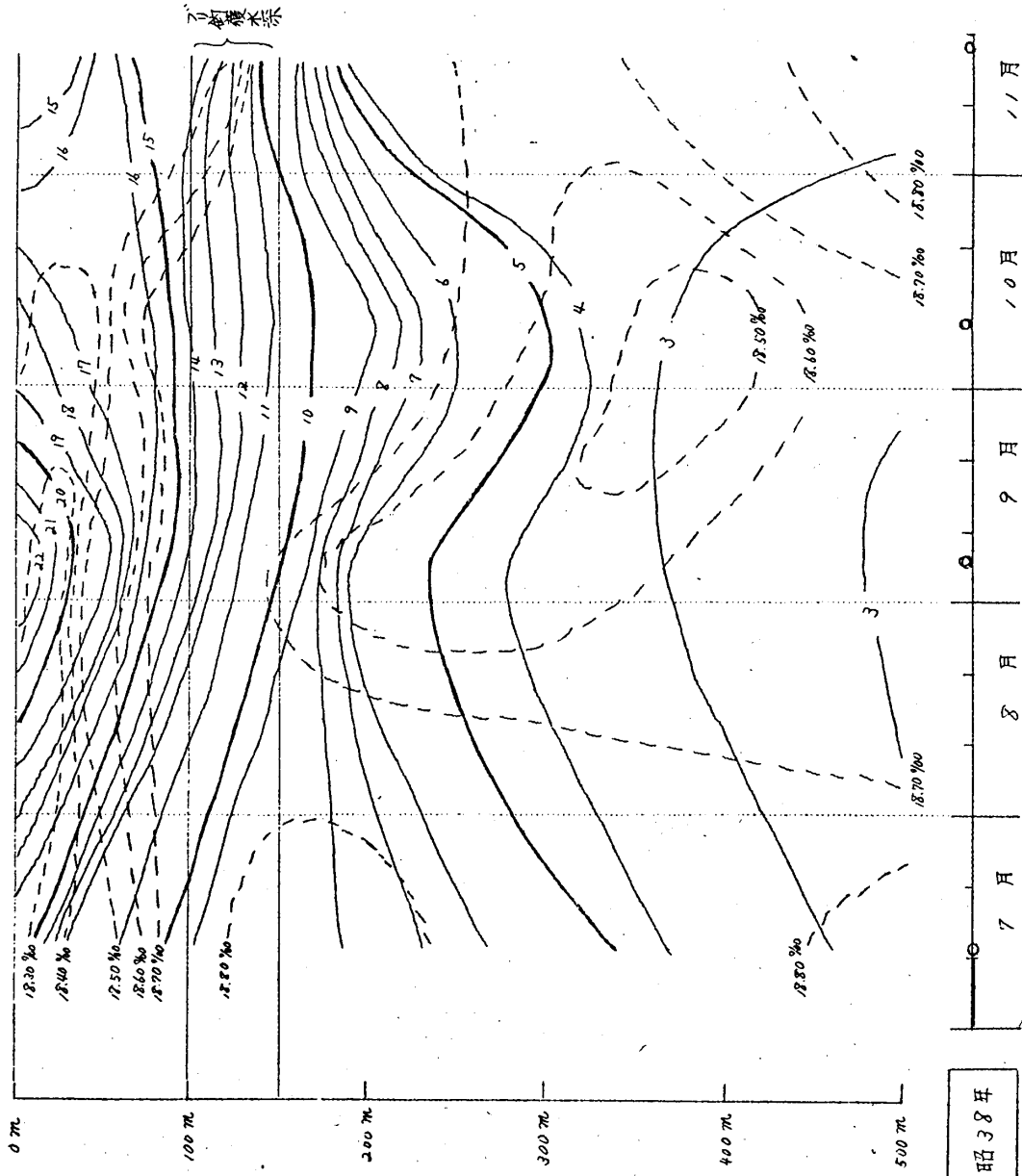
このためには、漁業者同志で互いに協力し合って調査研究を行なうと共に関係機関におかれましては沿岸漁民の漁場である大陸棚における海洋調査等を頻りに行ない、漁民に新しい情報を絶えずお知らせ下さって、私達を御指導くださることをお願いする次第であります。

終りに臨み、漁獲統計について御手数をかけた大瀬町・風間浦村・大瀬町・東通村の統計係、海洋観測の基礎資料を配布くださった青森県水産試験場

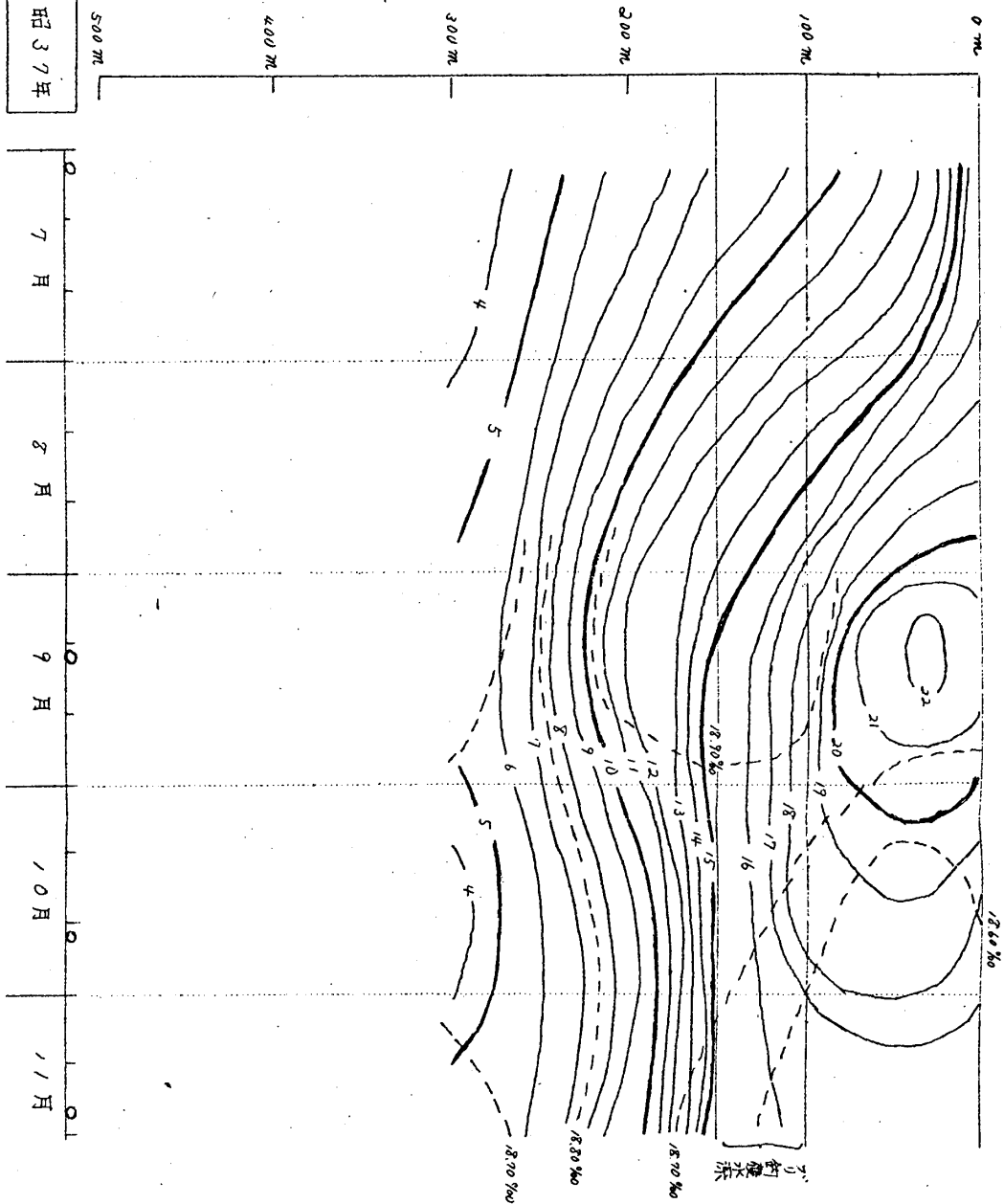
取負および資料の提供、とりまどめの御指導くださった山形普及員に感謝の意を表しまして、この発表を終わります。

7
4
6
74
73

水温
6回、
今後
かつ
毎年
つは
接目
。又
暖流
ろで
従つ
ともち
と共に
調査等
を御指
大畑町
試験場

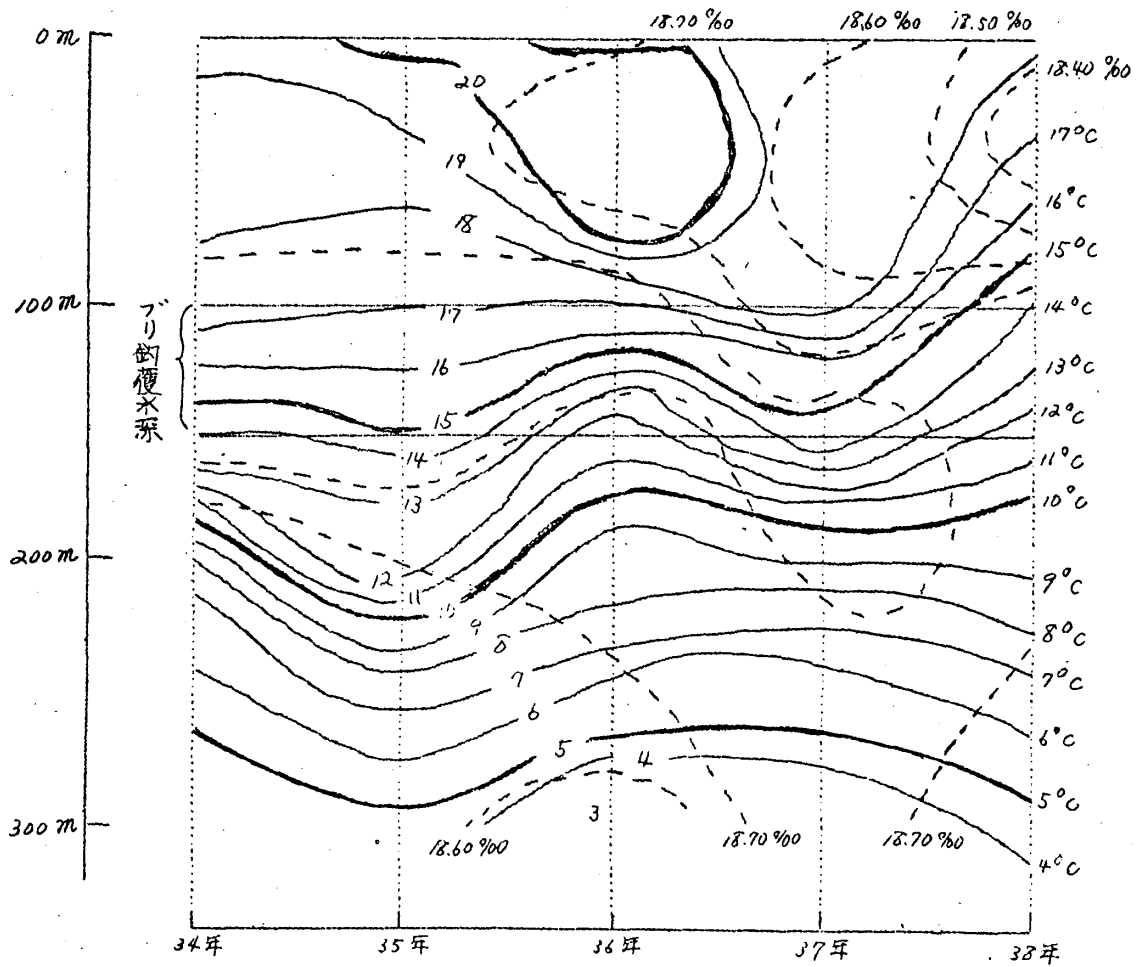


第3図 尻屋沖ブナ漁場附近の水溫・塩素量季節変化の観測日



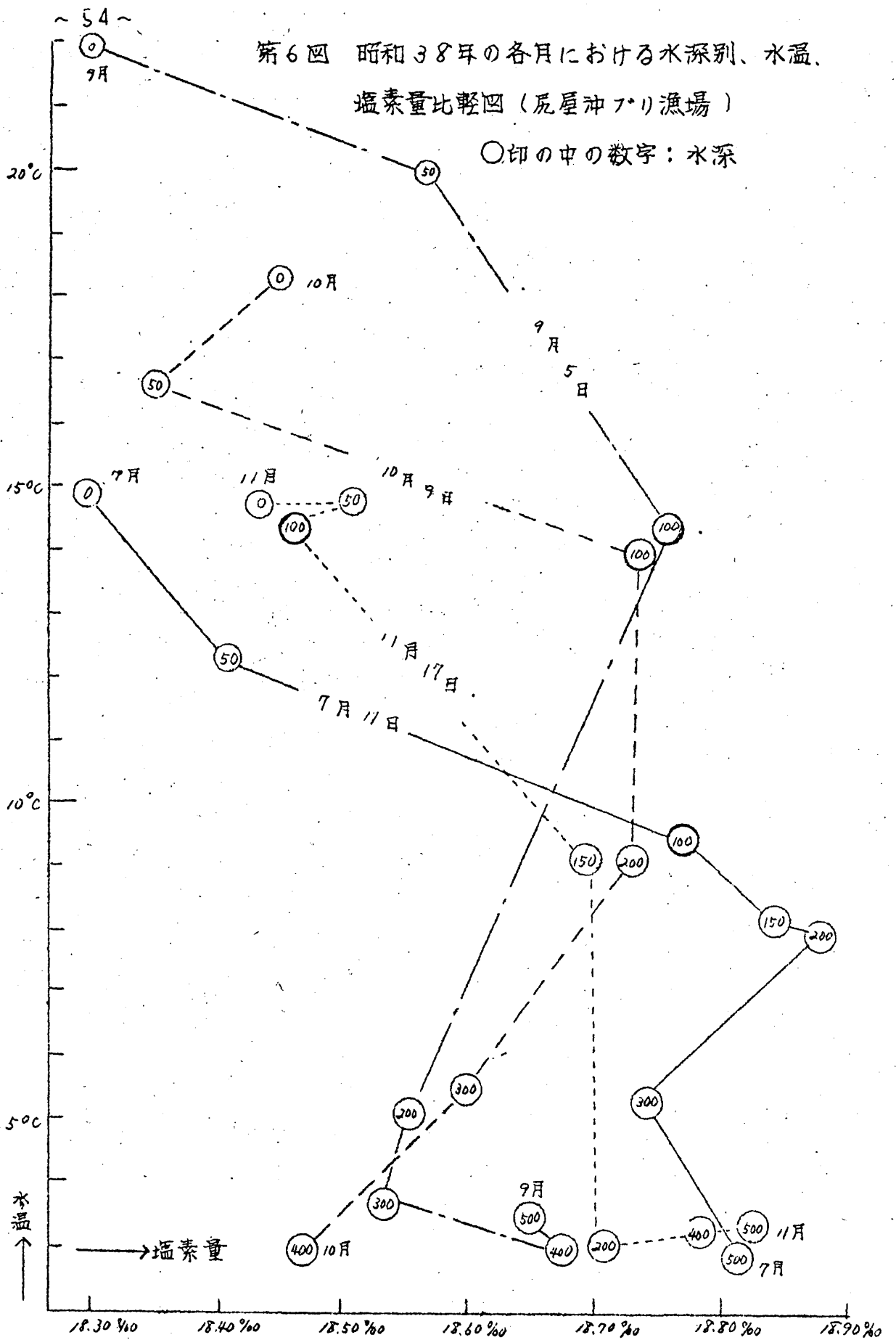
第4図 尻屋沖ナマリ漁場附近の水温・塩素量季節変化。印観測日

昭37年



第5図 各年10月初旬の水温・塩素量比較
(尻屋沖フリ漁場附近)

第6図 昭和38年の各月における水深別、水温、塩素量比較図（尻屋沖フリ漁場）



十月内

